

# 針葉樹会報

第105号  
2005年10月



## 目次

未踏の鹿島槍は七十歳の出発点となるか?  
—山に生かされた人生五十年を終えて—

西中国山地について  
【リレー投稿 その6】  
山登りが止まらない  
上原  
中西  
中西

### 沢・三題

ふらつと沢登り  
恋ノ岐川遡行  
卒業記念沢泳ぎ  
古瀬  
鳥本  
古田

### 商大ルート

伊藤助成君追悼  
勝田有恒君を悼む  
牛ちゃんを偲ぶ  
牛チヤンと共にした山旅  
昭和35年の夏合宿  
ギューチやんの思い出  
牛ちゃんと思う  
ギューチやんと一緒に  
山田  
中村  
中原  
中川  
石川  
小川  
永井  
三股  
林  
尚新  
正弘  
滋  
正司  
禎也  
宏直  
光夫  
脩司  
秀明  
真泰  
司介  
茂  
利巖  
夫

追悼 ■■■■■  
■■■■■  
三月会通信  
平成17年度針葉樹会総会報告  
編集後記  
05年5月14日 撮影・竹中彰

表紙写真 II 爺南峰からの鹿島槍と冷池小屋。

05年5月14日

撮影・竹中彰

40 38 31 28 28 26 25 24 22 20 20 17 15 13 12 10 4 2

発行日 2005年10月20日

発行者 針葉樹会

印刷所 ヤマノ印刷(株)

針葉樹会報  
第105号

編集人 有賀 盈  
〒150-0012  
渋谷区広尾 3-9-22  
会報幹事／有賀 盈、井草長雄  
川名真理、大谷公重

## 未踏の鹿島槍は

### 七十歳の出発点となるか？

——山に生かされた人生五十年を終えて

上原 利夫（昭33年卒）

鹿島槍には、過去何回も近づきながら、まだ頂上を踏んでいない。この二〇〇五年五月も、佐薙恭さん（昭31）竹中彰君（昭39）と一緒に冷池山荘までたどり着きながら、天候に恵まれず登頂できなかつた。しかし、私にとっては節目の登山であつた。その山行の概要と表題について述べたい。

#### (1) 行程の概要

五月十三日（金）の朝立ちで佐薙さんと二人で信濃大町へ向かう。「こばやし」で手打ち

そばの昼食を味わつてから大町山岳博物館へ。ここでの発見は、小谷部全助先輩自筆の山日記だつた。きれいな字できちんと横書きされていた。針葉樹会員でこれを観た人は多くないだろう。それはそうだ。午後一時過ぎから翌朝まで大町で時間を過ごせる暇人はそ

んなにいない。現に、同行した竹中君は夜行で十四日早朝に大町に着いて先発組に合流し、一日早く帰つたくらい忙しいからだ。

われわれの行程は、十四日（土）は扇沢出

合から種池山荘に通じる柏原新道に入り、一時間ほど登った地点で右折、爺ヶ岳南尾根に至る冬道を登る。冷池山荘までが第一日目である。好天に恵まれ、爺の南峰頂上から槍・穂高も遠望できた。勿論、目の前には剣がばつちり、鹿島槍の双耳峰も魅力的だ。十五日（日）は鹿島槍北峰までを往復する予定だつたが、天候が思わずしくなく断念した。竹中君は早朝から風雪のなか往路を戻り、その日のうちに帰宅した。残つた二人は冷池山荘に連泊し、快晴になつた十六日（月）に下山した。今回われわれは三人とも鹿島槍に登れなかつたが、冬山を思わせる吹雪の中の行動や膝までのラッセルをする羽目となり、学生時代の経験が役に立つた。

#### (2) 五月十四日

夜行で到着した竹中君を駅前でピックアップ。タクシーで柏原新道登山口へ。約6時間で爺南峰へ。またとない好天で、スキーを担ぐ登山者もいた。踏み跡も残りラッセルなどなし。冷池山荘の宿泊者は、われわれ三人の他はスキーを担いだ若者二人のみ。夕食は17

時30分。宿主から缶ビールのプレゼントあり。食後、テレビの悲観的な天気予報を観て明日の予定を見直す。

#### (3) 五月十五日

5時30分朝食。予報通りの強い風、横なぐりのみぞれ状の雪。鹿島槍登頂の後、爺を越えて種池泊は無理となり、冷池に連泊することにした。竹中君は一挙下山。佐薙さんと私は、天気は良くないが鹿島槍をトライしようと10時30分に出発。途中で二人の若い女性が降りて來るのに出会つた。昨日は鹿島槍東尾根を登り、頂上付近でテントを張つたとか、これから赤岩尾根を降るというさわやかな人たち。彼女たちはザイルを持つていた。ゴーグルで顔は分からぬが、やるもんだなど感心。

彼女らの踏み跡は布引岳の少し下のあたりまでは残つていたが、風が強く雪がクラストしており、天候もよくなる兆しがないので引き返した。往復二時間の適当な運動であつた。お腹が空いていたので、山荘でラーメンを注文。代金700円は、連泊の値引き700円と等しかつたので、只でラーメンを食べた気分であつた。午後は、客のいない喫茶室で山や植物の図鑑や書物などをめくつて、静かな時間を費やした。夜の客はわれわれのみ。

ここで、単独下山した竹中君による十五日の行動を記しておく。

「五月十五日（日） 本日は昨夜の天気予報通り、朝から雪混じりで気温も零度前後、とにかく予定通り朝食を摂つたが、朝の天気予報も芳しくなく、佐薙、上原両先輩は小屋で沈殿して、天気の具合で鹿島槍を往復、明日は回復した天気の中を下山すると決定されたが、当方は月曜日に気になることがあるので、下山を決意。小屋の女性は、連休中の南尾根下山途中での行方不明者の例（二日間見つからなかつたとのこと）があるので、三人同時に行動を要請するも、下山したら、大町の小屋のオーナー柏原家に連絡することにして7時10分に下山スタート。

視界は30m前後で、黒部側から雪混じりの烈風が吹きつけ思わずピッケルで体を支えることも。久し振りのアイゼンで、昨日のトレスの上に新雪が積もり、朝6時頃に冷池のテント場を撤収していった単独行者のトレースも眼鏡が曇つて良く見えず、時々深みにはまつて前転も。瞬間にフードで押させていた箸の帽子を飛ばされる。周囲が見えないので時に違う方向に歩きかけることも。磁石を小まめにチェックし、何とかルートを外すことなく爺南峰を9時30分通過。小屋から二時間

二十分要したことになり、二時間の目標タイムから大分遅れた。

下りにかかると、流石に風も若干弱くなり、トレースも種池小屋から出たパーティーのものがはつきりしていて助かる。10時40分にアイゼンを外し、足元は軽くなつたが、林間を下山途中で所々で踏み跡を見失い、夏道の方へ雪渓を下り、登り直すことも。木の根などで歩きにくくルートをひたすら辿る。林間で何回か雷鳴を聞くが、縦走路でなくて良かつたと胸をなでおろす。蓮華、針の木方面からなだれの音も聞こえる中、アラレ交じりの雨となつて、12時15分に夏道との分岐点（1650m）に着き、先行した種池からのパーティに会う。

更に下り続け、12時50分に1350mの登山道入り口（扇沢出合）到着。しかし、扇沢バスターミナルは更に二十分後の13時15分。早速約束どおり柏原家に無事下山を電話連絡。13時35分の大町行きバスを捉まえて、15時29分発スーザー・バーあづさで帰郷。

鹿島槍往復は断念しましたが、久し振りに厳しい後立山の稜線を辿り、数十年前の冬合宿で新越乗越からほうほうの体で下山したことをなどを思い出しました」「H U H A C メーリングリスト5月15日投稿より」。

#### (4) 五月十六日

好天。気温低く早朝の山荘付近でマイナス九度の由。6時30分、冬山的服装で下山開始。夏道コースタイムの倍以上の三時間強で爺南峰へ。所により新雪のラッセルが膝まで。眺望は素晴らしい、遠く富士、南アルプスまで見えた。冬ルートの下山路は樹林帯に入ると樹の根っこなど多く歩きにくい。13時30分、登山口着。薬師の湯で汗を流し、駅前で一杯。日付が変るころ帰宅した。

前日、竹中君は単独行で吹雪の中を下山したが、南尾根の下りは踏み跡も比較的しつかりついていたものの、林間に入ると時々見失い、修正に思いの外時間を食つたらしい。佐薙・上原組もこれと同じような経験をした。間違いに気付いて戻った道は、往復で踏まれるから後の人も迷い込み易い。連休中に行方不明となつた人も同じ所で間違つたのかもしれない。

#### (5) 増改築された冷池山荘

冷池山荘は昨年建て替えられて快適である。若い管理人（男二人、女一人）が五月から十月まで常駐しており、下界の事務所と日に三回、無線連絡をしている。この連絡ついでに、竹中君の無事下山が入りホッとした。山荘の従業員も喜んでいた。この人たちは嘗

業期間中に一回下山するだけという。新越山荘や種池山荘での勤務経験をもつが、よく頑張ると感心する。女性の一人は食事を仕切り、他の一人は営業・接客を担当している。感じの良い親切な人たちである。朝食は5時30分にあたたかい味噌汁、ご飯を出しててくれる。夕食は17時30分から。質・量ともに適切でおいしい。宿泊客は水一リットルがもらえる。

二階の廊下には壁灯が多く豪華な感じである。山荘と呼ばれる所以か。客が少ないせいもあり、ゆっくり過ごせた。消灯は20時15分。

今回は、私の人生リストラ最初の山だつた。七十歳にもなれば、いつ死んでもよいようにしておかなくてはならない。昨年からその準備を進め、これがほぼ終わった。ようやく真の定年を迎えたのである。

五十年前の一九五五年三月、横尾の岩小屋をベースにして行われた一橋山岳部の春山合宿で、大学一年の私はスキーを履いて涸沢まで、そこからアイゼンを付けピッケルを持つて奥穂高に登った。頂上から凸状になつた斜面の下降では、足を滑らせれば身体が白出谷に飛んで行きそだつた。アイゼンを一步一歩雪面に叩きつけ、飲み込む唾もなく、すごく緊張した。これほど真剣に身を守り、生に執着している自分を発見したのである。この

時を境にして、私は死ぬことは考えなくなつた。

私は、かねてより百二十歳まで生きると言つて来た。それは人生をまつとうする意味であつて、生きる目標ではないので、リストラ後、何を目標にして生きればよいのかを考えた。このような時に、私は多分二十代であろう若い女性たちの生きる姿に感動した。

鹿島槍から降りてきた二人と山荘で働く二人は明るく、普段見る女性を超える頼もしい人たちであった。力ネで勝負する若者がいる反面、心を大切にする若者もいるのは嬉しい。七十歳の私に生氣を湧かせるパワーの持ち主である彼女らを思いつつ、未踏の鹿島槍に登ろう。

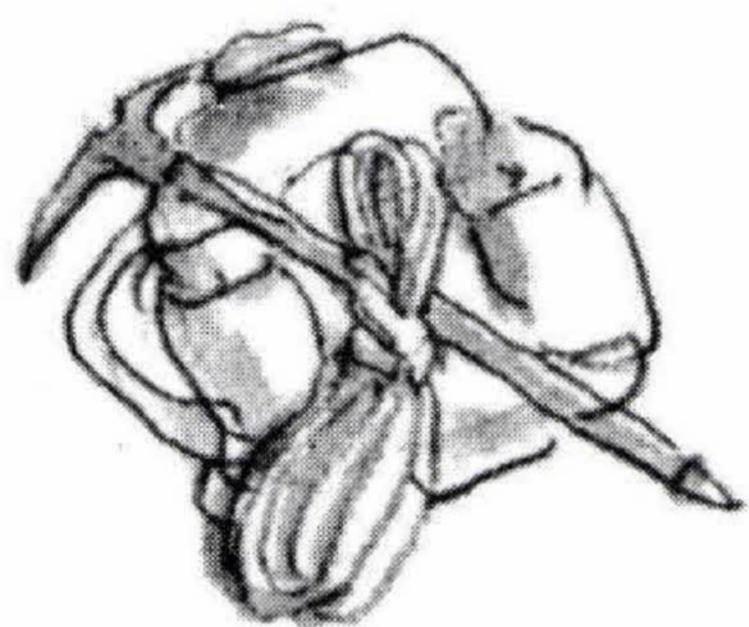
西中國山地には、数年前良き「先達」をして度々訪れました。この二、三年は主として海外に出掛けていたためご無沙汰していますが、秀麗な山、深い谷、ブナやミズナラ等の巨木に覆われた山など魅力的な山々です。またタタラ師、木地師などの活躍した深い森の山々で多くの伝説も残っています。その時の記憶を辿りつつ山や渓谷の状況を、地誌を交えて報告します。皆さんには馴染みの無い山々であると思われますので、所在、山名、山容、渓谷、登山路を具体的に書いておくことにします。

## はじめに

西中國山地は広島県西北部から島根県東南部（一部山口県）にかけての、標高1200メートルから1350メートルの山々です。中国自動車道を広島北JCより西に進むと

## 西中國山地について

中西 嶽（昭35年卒）



直ちに長大なトンネルに入ります。トンネルを出るとすぐに深い渓谷となり、渓谷を渡るとすぐトンネルに入り、さらに渓谷を渡ること数度で戸河内インターに着きます。見下ろす渓谷の深さは60メートル以上あるでしょうか、如何にも深い山国に入つたことを実感します。

広島北JC、戸河内インター、次の吉和インター、その次の六日市インターの間の山地一帯が西中国山地で、ここに紹介するのはその核心をなす中国自動車道の北側の山々です。中国自動車道は、西中国山地の高原を駆け抜けていきます。4月上旬のハイウェイの両側にはまだ残雪がみられました。

中国自動車道の開通により、今日では比較

的容易に西中国山地に入る事が出来るようになりました。昭和30年代までは日本有数の秘境であり、人の近づき難い山々、渓谷が多くタカラ師や木地師のほか足を踏み入れた事のない、深い原生林に覆われた山々でありましたが、昭和40年代に入るとともに国道が整備され、地方道が開通し、豊富な木の経済価値を求めて林野庁が林道を開削、西中国山地の開発が進み、そして原生林の乱伐が行われ秘境が破壊されました。

林野庁の独立採算が言われた時、自ら育てた木を売つての独立採算と思つていました

が、江戸時代あるいはそれ以前から各藩が大事にしてきた森林を伐採して、自分たちの給料に充てただけのこと、文字通り財産の切り売りをしたわけで、その結果貴重な日本の財産が失われ、自然が破壊されました。まさにその現場が西中国山地です。

この地方は日本有数の豪雪地帯です。今年は特に雪が多かったようで、先般の地震の被災地、中越地方が豪雪に見舞われたその日、この山地にある芸北町の八幡高原では一日の積雪が1メートルに達したとTVが報道しているのを目りました。

### 広島県側の山々と渓谷

「八幡高原」盆地状の広い高原で標高約800メートルにあります。中国地方では最も降雨量の多い所で湿原が沢山あります。平均気温は約10度、青森近辺に等しい気温です。戦後開拓者が入りましたが寒冷地のため稲作には不向きで成功しなかつたようですが、今日では品種改良が進み寒冷地向きの品種も生まれ、一部で稲作がなされています。高原の東北部その他の乾燥地には牧場があります。

この高原の周辺に、西中国山地の広島県側の主な山々である臥竜山(1223m)、恐羅

漢山(1346m)、砥石川山(1170m)、十方山(1319m)、冠山(1339m)、寂地山(1339m)などがあります。

これらの山々が太平洋(瀬戸内)と日本海との分水嶺をなしています。八幡高原とこれら周辺の山々を流れ出た豊富な水は、この山地の断層に沿つて貫流、山を削り、約12キロメートルの深い渓谷となっています。この間の高度差は約400メートル、これが絶壁、渦、奇岩、滝を誇る天下の名勝三段峡です。

「三段峡」戸河内の奥に奇勝のある事は、安芸藩時代から一部に知られていましたが、世に知られる様になったのは、大正11年7月に芸備日日新聞が探検隊を組織して入峡、報じてからです。その探検記は冒頭に「戸河内の奥には天下に冠絶する、雄偉豪壯の一大絶勝があるが、人跡未踏とも言つて良い神秘境で、渓谷を渡り岩角を伝うこと宛も翼あるもの如き木材人夫以外には、戸河内の人といえども未だ絶勝を見た者がいないと伝えられている……」とし、「戸河内秘境探検記」を二十二回にわたり詳しく連載しました。翌年十一月、その次の年の五月と一度にわたり内務省の調査班が入峡、「三段峡」と名付け、名勝に指定しました。昭和26年11月には国の「特別名勝地」となりました。

三段峡の奥、恐羅漢山の南面と北面から流れ出た谷は、本流と二分する大きな渓谷で、その中流約2キロメートルが「奥三段峡」と呼ばれています。

三段峡は途中多くの支流の水を集めて水量豊富で、多くの渕があります。猿飛、黒渕は絶壁に囲まれた渕で、船でしかいけません。

名のもととなつた三段の滝をはじめ、多くの滝があります。渓谷周辺は原生林が残されていますが、その外は伐採が進んでおり、食べ物を求めて熊が出てきたとの話もあり、考えられない事が起ります。

三段峡を流れ出た川は大田川となり、戸河内北の湾曲部で大きな支流滝山川を合流、さらに多くの支流を合わせて大河となり、広島市の三角デルタを形成し瀬戸内海に流れ出ます。

### 〔ブナ林〕

西中國山地はまた日本有数のブナ林のあつたところで、昭和30年代までは世界遺産の白神山地よりも規模の大きい国有林の、ブナ林の天然林があつたということです。これらのブナ林は営林署が何十年に亘り伐採、殆ど切り尽くしました。今日残されたブナの天然林は恐羅漢山の北西、台所原周辺、あるいは臥竜山の西面などで、ここには樹齢

200～300年、高さ30メートルを超える

ブナやミズナラなどの巨木が聳えています。

人の手の入らぬ昭和30年代には二度と戻らないにしろ、林野庁の自然破壊はこれ以上進めてほしくないものです。他方、民有林であつたためか、冠山、寂地山などにはブナ、ミズナラの巨木のある鬱蒼とした原生林が残されています。

恐羅漢という山名も、昭和30年代まで全山がブナやミズナラ、クロモジに覆われていた頃、長い間人を寄せ付けぬ山でリングワンドルングした話も多くあり、「入つたら迷つて抜け出せない恐ろしい山」との意味であったようです。

三段峡を流れ出た川は大田川となり、戸河内北の湾曲部で大きな支流滝山川を合流、さらによくの支流を合わせて大河となり、広島市の三角デルタを形成し瀬戸内海に流れ出ます。

### 〔恐羅漢山〕

西中國山地の中で最も奥深い位置にあり、周辺の村落からその山容を眺めることの出来ない山でした。昭和30年代に入り林道がつけられ、ブナ、ミズナラなどが切れ、最近ではスキー場もできて、東面側は比較的入りやすくなりましたが。それでも内黒峠(990m)越えの厳しい山越えがありまます。昭和30年代に雪の峠道で3名の山仲間が寒気と雪崩で亡くなつており、その遭難碑が峠にあります。

近年ではスキー場ができる除雪され、通常通行できるようになりましたが、スリップして谷に落ちている車を見かける事もあり、今

も難所のようです。

恐羅漢山への登路は、戸河内インターでおり国道191号を西にJR可部線に沿つて進み、三段峡駅の近くから県道恐羅漢公園線に入り、内黒峠を越え横川の二軒小屋より登るのが一般的です。二軒小屋より牛小屋のキャンプ場に登り、立山尾根を越え牛小屋谷をトランバースぎみに渡り、夏焼峠(ナツヤケノキビレ)から尾根に取り付き山頂に向かいます。

北面の中川川(なかごうがわ)から台所原へ出て登るルートもありますが一般的とはいえない。八幡高原の長者が原から林道に入り十数キロと長大な難路を進み台所原に出ます。途中にタタラ場跡や木地師の住居跡とおぼしき礎石が残り、深い山に来たなーとの印象を受けます。台所原は秘境中の秘境です。台所原からはブナの天然林の中を登ります。この辺りは熊が多いので、熊を気にしながらの登高となります。

また島根県匹見町道川の亀井谷を登り台所原に出る事も出来ます。亀井谷上部はブナやミズナラで覆われた険しい谷です。滝を幾つも巻き、三十三曲がりの急登をあえぎながら登る難路を経て台所原につきます。厳しい沢登りの好きな人向きで、一般的ではありません。

恐羅漢山は形のいい双耳峰で、山頂はアシ

ウ杉の樹林帯となっています。もう一つの山頂を旧羅漢山といい山頂には巨岩があり、その横に三笠宮寛仁殿下・五十三年十月と書かれた花崗岩の石碑が立っています。巨岩の上で昼食を摂っていたとき観光客を乗せたヘリコプターが飛来、我々を見つけ何度も頭上を回り乗客と交歓した楽しい思い出があります。

は急落していく標高差800メートル近くあり、登り応えがあります。展望のあまりきかない樹下の尾根の急登に喘いで登りつめた山頂のササハラの大らかさが気に入っているのでしょうか。

十方山への登路は、吉和村から立岩ダムに向かう手前から瀬戸谷に入るコースが一般的です。途中少し寄り道をすると瀬戸滝があります。滝は落差数十メートル、二段の滝になつていて、水量豊富です。滝の上部から東にトラバースすると元の道に戻ります。沢道を登りつめると尾根に出ますが、この沢はカエデが多い明るい沢です。尾根は三つ倉という1030メートルのピークを越えて頂上に通じています。

「砥石川山」この山から良質の砥石が取れることがあります。この山の北側が奥三段峡です。恐羅漢山の北尾根をなす山で、登路は恐羅漢山で述べた夏ヤケのキビレから北東に登ります。

その他の先に述べた山々についても紹介します。

「十方山」じっぽうさん 秀麗な双耳峰で昔から有名な山で、江戸時代の国学者が「日本書紀」神代記に載っているとの説を持ち出しています。中国自動車道を西へ走ると、吉和のインターを過ぎた辺りに、北側に十方山が見えます。今年も4月初めに山口へ向かう途中、真っ白に冠雪したこの山が見えました。

西中国の山の中で十方山が好きだという人が多いようです。山塊が大きく、立岩ダム側

内黒峠から彦八の頭、丸子の頭、三つ倉（右記の三つ倉とは別）と長大な北尾根を縦走する登路もあります。このコースは昭和52年のインターハイの時に整備されました。この縦走路は尾根に忠実に付けられており展望が良く、恐羅漢山、旧羅漢山の双耳峰の眺めが特に美しい。内黒峠から5時間ほどかかります。

横川の二軒小屋から林道を横川川（よこざわ）の源流に向かって溯り水越峠の手前からシシガ谷を登るコースもあります。杉の植林帯を登りますが、所々ぬかるみがあり歩き難く、展望もききません。この杉林を抜け

**冠山** 広島、島根、山口の県境には1300メートル標高の山々が小隆起を加えると五峰ほど東西に並んでいます。山頂付近は1250メートルの等高線を境にして、それより低い所は急峻で、高い部分は平坦になつていると、いう西中国山地特有の地形を示しています。この山塊の東端が冠山で、西端が寂地山です。冠山の東尾根にある「狗留孫仏岩」は良く知られています。冠山は山頂の北面に「懸崖」があり、付近の山々から眺めるとすぐにそれと分かります。北、東北、西面はブナの巨木の天然林で、樹林の好きな者には魅力的です。ここにブナ林が残つたのは民有林であつたためらしい。中国道を吉和SAから西へ走ると西北方向に、この山特有の形からすぐにそれと分かります。

て広葉樹帯を急登すると、北峰の大岩に出ます。この付近から展望が開け、周辺の山々の素晴らしい風景が見えます。このコースを登った時は台風で広島県中部に大被害のあつたときで、横川林道はずたずたに寸断されており難渋の登りであつたのを覚えています。なお、このコースでシシガ谷に入らず林道を少し水越峠に向かつて登つたところの北側に、旧羅漢山への登り口があります。

**冠山** 広島、島根、山口の県境には1300メートル標高の山々が小隆起を加えると五峰ほど東西に並んでいます。山頂付近は1250メートルの等高線を境にして、それより低い所は急峻で、高い部分は平坦になつていて、この山塊の東端が冠山で、西端が寂地山です。冠山の東尾根にある「狗留孫仏岩」は良く知られています。冠山は山頂の北面に「懸崖」があり、付近の山々から眺めるとすぐにそれと分かります。北、東北、西面はブナの巨木の天然林で、樹林の好きな者には魅力的です。ここにブナ林が残つたのは民有林であつたためらしい。中国道を吉和SAから西へ走ると西北方向に、この山特有の形からすぐにそれと分かれます。

口、**潮原**<sup>うしおばら</sup> 温泉から北へ中国道の高架をくぐつてすぐから登山道がついています。クロモジ、ウスケクロモジの多い明るい雑木林の登路です。山頂に近づくにつれてブナ林に変わり、ひと登りすると頂上に出ます。頂上付近には熊が多いので注意が必要です。遠くで黒いものが横切るのを見たことがあります。山頂は周囲が樹林の為に展望がききませんが、北へ30メートルほど歩くと山頂北面の懸崖の上に出来ます。ここは北方の展望が開けて、十方山から恐羅漢山へかけて一望のもとに見晴らせます。この展望の素晴らしさは有名です。山頂にはサラサドウダン、オオヤマレンゲがあるのも珍しい。

### 【寂地山】

冠山から西へ続いている平坦な尾根の西端の山口県と島根県境にあるブナの巨木の天然林に覆われた山です。これといった特徴も無く平坦な尾根上の小さな丘といったところです。島根県側では村里から遠く無名の山ですが、山口県側では常国、宇佐の村里に近いため早くから広く知られていたようです。この為、寂地山への登路は山口県側にあります。国道434号を山口県側に入つてすぐの宇佐より寂地川に沿つた寂地川林道をつめて行きます。林道の終点からにしづく谷に入り、ジグザグ道を登りアシウスギの杉林

を過ぎ、広葉樹林の中を登り詰めると尾根に出来ます。頂上に向かうと分岐があり右に出るト頂上です。寂地川は名水100選に選ばれた名水で、また五竜の滝は滝100選に選ばれています。また寂地山から東へ冠山に向かう小道は気持のいい道で、5月に登った時はカタクリが花盛りでした。頂上一帯はブナの古木で覆われた平坦地である為、霧の時はリングワンデルングの危険性があります。山頂には「山口国体炉火採火之地」の碑があります。

### 【臥竜山】

この山の周辺にはタタラ場が多く、人の移動が多いため昔から有名であったようです。周辺の掛頭山、深入山が採草と放牧のため山頂が草地になっているのに比

島根県側の主な山として、安蔵寺山(1262m)、大神ヶ岳(1177m)、広見山(1187m)、半四郎山(1126m)があります。

### 島根県側の山々と渓谷

それを横切りさらに西南尾根に入るとミズナラの純林となり頂上まで続いています。山頂のすぐ下には雪靈水と呼ばれる水場があります。

### 【安蔵寺山】

西中國山地国定公園の西端にあるこの山は、西中國山地の主稜より離れた位置にあり独立した山塊をなしています。燕

岳、安蔵寺山、香仙原と南北に続く主稜の西

側は、津和野藩の保護のもと芦谷原生林として有名でしたが、国有林になり昭和40年代から逐次ブナ等の天然林は皆伐されてしましました。これと対照的に稜線から東側は民有林であったためか、ブナ、ミズナラ、カエデの天然林が残されています。安蔵寺の山名はこの山の南の鞍部の寺床に、「安蔵寺」という寺が有つたため名付けられた様です。寺には50~60名の僧兵がいたとの記録も残っています。

安蔵寺山は三つのピークからなり南峰が最高峰です。三つの峰はブナ、ミズナラの天然

林に覆われ、特に主峰の北側はミズナラの古木で覆われています。秋にこの山に登った時、頂上近くの登山路に熊の足跡があり、枝を折つてどんぐりをしごいたミズナラの枝が散乱していました。熊の仕業であろうと用心しながら進んでいたその時、30メートルほど先のミズナラの巨木からばりばりどすんという音とともに黒いものがどさつと落ちて逃げていくのが見えました。向こうも驚いたろうがこちらもひやりとした。西中国山地には熊が多いので鈴は欠かせません。

安藏寺山への登路は、六日市インターを降りて国道187号を北へ、15キロほど先で木部谷から滑峠<sup>ぬめつとう</sup>林道に入り峠を越えてすぐ右折、安藏寺林道に入り10キロ進んだところのトンネルの入り口の右側から登り出します。稜線に出るとブナ、ミズナラの天然林に変わります。ミズナラの巨木が「天然記念物」として玉垣で囲つてあるのに出会います。稜線を南に進みピークを二つ越えた三つ目が頂上です。その手前の鞍部が寺床です。

**【大神ヶ岳】**匹見町の人里を遠く離れたこの山は、その名が示す様に信仰の山です。頂上に巨大な岩が在りその下に祠があります。この山の嶺続きに立岩山<sup>たていわやま</sup>がありどちらも靈山で、その昔山伏が二つの山を往来していたよ

うです。登り口の林道の傍らに舞台がしつらえがあり、秋の祭りには匹見町<sup>みかずら</sup>三葛をはじめとする紙祖川流域の人々により神樂が奉納されます。以前は原生林に覆われていましたが、林道がつけられ山頂部を除き皆伐され杉林に替つてしましました。林道（三坂谷）がつけられ、人里離れたこの山も近づきやすくなり登る人もできました。昭和55年島根県側の三坂谷林道と広島県側八郎谷林道を結ぶ300メートルのトンネルが開通し広島県側からも容易に近くまで行けるようになりました。このトンネルは1050メートルの高所にあり難工事であつたようです。

大神ヶ岳へは吉和インターから国道186号を経て488号に入り、8キロほど先を三坂八郎林道に入り10キロほど先のトンネルを抜けてすぐに登り口があります。杉林を抜けると天然林に変わり、さらに登ると頂上の大岩の下にでます。大岩からの展望はよく南西に安藏寺山、南に寂地山などが見えます。

昔の集落付近にはワサビ田があり人が時々通つてゐる様でした。今では匹見の町からの道がつき、また三坂峠越えの林道もあります。とはいへ今でも不便な事には変わらぬようです。冬季は雪で通行止めとなります。広見には三坂峠越えで行きましたが、匹見の町への道は豪雨で寸断され通行止めとなっていました。

広見谷の下流の狭隘部を裏匹見峠、広見山、半四郎山の二つの山塊の北側を表匹見峠、そして続く長い尾根は徐々に高度を下げ、ジョシのキビレと呼ばれている最低鞍部よりも高度を上げ南に折れて、県境の主稜と平行に続いているのがこの二つの山です。

恐羅漢山から南に伸びる県境山稜とこの二つの山に挟まれた谷を広見谷といい、裏匹見峠と呼ばれる狭隘部を抜けたところの平坦地に広見という奥深い村落がありました。古くからの歴史をもつこの村落は交通不便で、昭和38年の豪雪以来離村者が相次ぎ今では無くなっています。以来40年弱、家々は崩れ田畠に植えられた杉は大きく天を指していました。小学校跡も形をとどめるばかりになつてきました。

定されています。広見川の水源帯の原生林は大伐採が行われており水量が著しく減じていって、昔の趣はなくなっているとのことです。

【広見山】広見という村落の奥にある山という意味で、頂上はササに覆われた見晴らしのいい山であるとのことですが、あまりにも奥深い山があるので登る人も少ない様です。

【半四郎山】広見山の1キロほど南にある山で、木地師の先達、半四郎がその息子と共に大正13年3月上旬思わぬ大雪のため山頂付近で遭難したことにより、その名が付けられました。遭難のいきさつについては匹見町史に詳しくのっています。広見側からは比較的簡単に登れるとのことで、広見の奥を目指したとき半四郎山登山口の標識のあるのを見つけました。頂上はササハラで見晴らしは素晴らしいとのことです。奥深い山であるのでここも登る人は少ないとのことです。

終わりに

西中國山地の主な山、ブナやミズナラ、クロモジなどの原生林の残る魅力ある山々、美しい渓谷について述べました。

西中國山地は道路が付けられ木が切られま

したが、まだまだ奥深い所、人の近づき難い渓谷があり、月の輪熊の天国もあります。伝説も多く残されています。タタラ場跡があり、木地師の住まい跡と思しきところもあります。天上の花、「キレンゲショウマ」もこの山の何処かにあるという事です。多くの人が探していますがまだ見つかっていません。幻の花は幻の咲であつたほうが良いのであろうと思います。

西中國山地を紹介する本はあると思われますが、その山容や地誌、伝説などを概説する本は少ない様です。その中で広島大学元教授・桑原良敏先生著の『西中國山地』(淡水社)は素晴らしい本です。この稿を書くにあたり引用させていただきました。

西中國山地に入るには多くの場合林道を使います。林道によつては通行止めとなつている事があります。営林署、町役場に問い合わせてみる必要があります。林道は縦横に走つており標識が無いので、道を間違え易く、今何處に居るのか分からなくなりますので十分注意しなくてはなりません。以下は「先達」の話……。

### 【リレー投稿 その6】 山登りが止まらない

神野 隆 (昭54年卒)

昨年4月に、社会人になつて初めての東京転勤辞令を受けたものの、大阪にも所管部隊があり、行つたり来たりの二重生活。漸く今年から東京常駐かと思いきや、この8月から

だが、吉和のインターまでの林道には何箇所か分かれ道があり、昼間でも知つていなければ辿り着き難い。まして暗闇がそこまで来ている時刻。道筋を説明しても辿りつくのは難しかろう、車でリングワンドルングし兼ねないので、やむを得ず吉和のインターまで誘導したことがある」

林道走行には方角を十分確かめなくてはなりません。



はまたまた出向せよとのお達しを頂き、相変わらず腰の据わらぬ毎日が続いています。

という事で、卒業以来針葉樹の仕事を何もしていない不肖会員の私が、中西茂くん（1981年卒）の後を引き継いで、リレー執筆することになりました。

以下簡単に卒業以来の山登り遍歴（大したものではありませんが……）と現状を記して、ご無沙汰のご挨拶に代えさせて頂きたいと思っています。

1979年の卒業以来、5年間の香港駐在期間を除いて一貫して大阪勤務であつた私ですが、こと山登りに関して言えば、卒業以後の2、3年は、現役の合宿に合流してみたりして、夏の北ア周辺をうろうろしていたものの、その後は多くの諸先輩と同様？、仕事にかまけ、山登りはお留守になつておりました。1989年に香港転勤、ちょうど同時期に、中村保・中島寛の大先輩諸氏が駐在されていたらにもかかわらず、能力不足のために相変わらず仕事に忙殺され、お二人の薰陶に触れることもなく、幾度かの飲み会を開いたぐらいの体たらしくでした。

帰国する1993年のちょっと前からでしようか、休日に家族を連れて香港島の450m程度の裏山を、パンとチーズとワインを片

手に歩き始めました。大した山ではありませんが、トレッキングトレールもそれなりに整備され、久々の青空のもと、のんびり歩くことは爽快の一語でした。

この時の経験がやみつきになつたのでようか、帰国後も、神戸の六甲山の麓に居を構えた利便性もあり、週末を利用して六甲山の周辺を歩き廻りました。1995年には、あの阪神大震災に遭遇するものの、神戸の裏側の我が家はほとんどダメージもなく、逆に山歩きにはますます拍車が掛かつて来ました。

一般ルートは勿論、その内に山案内書に記載されているルートは登り尽くし、勝手に六甲バリエーションと称し、踏跡程度の山道を軽装で駆け抜けるようになり、ご存知の加藤文太郎が昭和初期に走破したと言う六甲全山縦走56キロにも、幾度か挑戦しました（因みにベストタイムは11時間。文太郎はまだ道も整備されていない時期に8時間半で完歩したそうで、現在の山岳マラソン最強者に至つては6時間半ぐらいで走るようです）。

こうなると止まりません！ 山を始めた中学時代の熱病に取り憑かれたが如く、近隣の比良山、鈴鹿山脈、大台ヶ原、大峰山脈、大山、白山とターゲットはどんどんと拡がり始めました。

ご多分に漏れず、やっぱり行くなら北アル

プスということになり、ちょうど帰国してから始めたオートキャンプとの併用で、1997年頃からは毎年夏休みは、平湯温泉近くのキャンプ場をベースに1週間程度の定着合宿を開始するようになりました。

相棒は嫁さんですが、その頃になるといい加減付き合うのも馬鹿らしくなってきたのか、否、体力的にもついて来れなくなってきたのか、彼女はベースでテントキー、私が単独で、槍・穂高周辺を歩き廻るという定型モデルが出来上がつてきました。

勿論、単独行はマイペースで歩けるので、煩わしいことはありませんが、独りはやはり寂しいし、もしもの時は嫌だなあ、と思う気持ちも当然有り、徐々にではありますが、会社の人間を誘うようになつたのもその頃でした。

昨今、中高年登山ブームの勢いには目を瞠るものがありますが（自分もその一人なのに）、みんな下界の生活に疲れているのか、「荷物を持ってやるから一緒に行こうよ」と騙して連れて行ったメンバーの大半が、ものの見事に山登りにはまつて行きます。

今更ながら、山登りの持つ楽しさ、根源的な冒険心といったものが、決まりきつた日常生活では経験できない刺激を与えてくれるのでしょうか、その素晴らしいしさを再認識する次

第です。

以上が、昨年までの大阪での山登り遍歴ですが、こちら東京に移って来てからも、大学時代以来20数年振りに、関東の山を訪ねています。奥多摩、丹沢に始まり、秩父、南ア、八ヶ岳、最近は車を持っている若手を見つけ、会津・朝日山系へも温泉付きで足を伸ばして

います。  
先日、前神さんを囲んだ集まりで酔った勢いもあり言つてしまつたのですが、3人の後輩が未だ眠っているホワイトセール峰に、せめて中腹までも、一度行ってみたいものと心底想つていてる次第です。  
ついては、その想いを込めて、次なる執筆者に引地くんを指名させて下さい。

### 沢・三題

#### ふらつと沢登り

古田 茂（平7年卒）

ややこしいことを考える前に、とにかく沢に行くことにした。

#### ふらつと川場谷

上越・越後方面の夜行列車はなくなつてしまつたが、今は新幹線がある。

沢登りは、やつぱりのんびりが一番。たき火にお酒、イワナなどあればもう最高。

であるが、現実はなかなか時間がとれない。

忙しいからのんびりしたいのに、忙しいから

のんびりできないじや、いつまでたつても

のんびりできない？ なんだかわけが分からぬ。

お盆過ぎ、上州武尊の川場谷にふらつと出かけた。

川場谷は下半部にやや暗さがあるが、中間部は明るい陽射しに水が輝く美しいナメやスダレ状の滝が続く。

緊張を強いられるような滝はなく、たつた1人でも山に守られているような気持ちになる。1人だと自然と足も速くなるが、大人數とは違いマイペースだし、動物のように全身で山を感じながら歩くので、せかせかした気分にはならない。意味もなく声を出し、その後の静けさを楽しんだり、ちょっとしょっぱいところを登つては、岩を味わう。露出する硫黄に遭遇し、何か発見したような気分になる。

つめは1975m近くのコルに突き上げる沢を詰めるのが正解だろうが、なぜか右に逸れる。笹のヤブこぎがしんどいが、ちょっとマゾヒティックな悦びがある。変態かもしれん。

稜線に出ても握手する人もなく、武尊を超えて、夕刻には上の原バス停に着いた。

駆け足のようでいて、気持ちのはんびりしたよい山行だった。

#### ふらつと豆焼沢

夏が去り、ツクツクボウシがにぎやかになってきたころ、たまたま1日休みができた。

夜9時、一見ヒマそうな宗像君に電話をかける。「沢行かねえ?」「明日は予定がありますから」所帯持ちの宗像君はいつの間にか忙しい人になっていた。しようがないので、近くのレンタカー屋でダイハツムーヴを借り、深夜、ひとり奥秩父の豆焼沢に向かった。

豆焼沢は、かつては奥秩父最奥の沢だつたが、雁坂トンネルができた今は、日帰りできる奥秩父入り口の沢になってしまった。

奥秩父随一の名渓とも言われたが、トンネル工事のおかげで、今では名高いホチの滝の上には大きな橋がかかり、ホチの滝の最上段にはでかいパイプから吹き出した水が降りかかり、苦笑を誘う。

しかし、その先は、まだまだ名渓である。

苔なんぞこの沢にでもあるが、どうして奥秩父の沢はこんなに苔が似合うのだろう。黒光りのする岩をすっぽり覆う苔は、他の山域にはない時間の流れを感じさせる。

早朝、出会いの丘駐車場を出発し、20段以上? 滝の続くコンクリ沢（わさび沢）を右岸づたいに沢床までおりる。

豆焼沢は滝が多いがそれほど難しくもなく楽しい。

調子に乗つたついで、50m大滝にも手を出してしまう。一見簡単そうで、実際下段は簡単だが、上段はシビア。フリーソロで超える

勇気もなく、右ブッシュに逃げた。

大滝の後、まだ小さいコクワの実を見つけ、囁く。甘酸っぱい。

美しいナメ滝を経て溯行終了。

雁坂小屋を経て黒岩尾根を下りる。黒岩尾根は大学演習林に入るため植生が豊かというが、実際、雰囲気のよい森が続く。

途中、直径60センチはありそうな朽ちた木が目の前で崩れ、斜面を落ちていった。

三富温泉で汗を流し、帰京。

散歩に行くようにふらっと山に行くのが楽しい今日この頃。

針葉樹会の若手はここ数年人数が少ないとめ、最近は兵藤さん、近藤さんといつた昭和50年代卒の先輩方とご一緒にさせていただく機会が多くなっている。今回は、兵藤さんの「草つきの高巻きが無く、盛大な焚き火ができる、岩魚が釣れる、のんびり系の沢」というご希望に対し私が恋ノ岐を提案したところ、意外にも皆さん未体験とのことで可決され、お盆明けの暑い盛りに行くことになった（残念ながら藤本さん、佐藤（活）さんは都合がつかず不参加）。また直前に平成6年卒の田形さん（現在鳥取で司法修習中）も参加することになり、15年ほどのギャップのある二世代の混成パーティとなつた。

メンバー＝前神、兵藤、近藤、田形、古瀬

古瀬 泰介（平成8年卒）

8月18日

朝、近藤さんの白いCherokeeで圏央道、関越道を北上。小出で買い出しした後に東へ進み、銀山湖方面へ向かう。近藤さんと古瀬にとつては、数年前にシロウ沢ワカゴイ沢を遡行したときを思い出させるルートである。

14時半頃、恋ノ岐出合に到着。先行者の車は見当たらぬが、車の往来はかなりある。

になっている。

針葉樹会の若手はここ数年人数が少ないとめ、最近は兵藤さん、近藤さんといつた昭和50年代卒の先輩方とご一緒にさせていただく機会が多くなっている。今回は、兵藤さんの「草つきの高巻きが無く、盛大な焚き火ができる、岩魚が釣れる、のんびり系の沢」というご希望に対し私が恋ノ岐を提案したところ、意外にも皆さん未体験とのことで可決され、お盆明けの暑い盛りに行くことになった（残念ながら藤本さん、佐藤（活）さんは都合がつかず不参加）。また直前に平成6年卒の田形さん（現在鳥取で司法修習中）も参加することになり、15年ほどのギャップのある二世代の混成パーティとなつた。

15時入渓。恋ノ岐は思っていたほど広い沢ではなかつた。水の勢いも適当で、リラックスした沢登りになりそうだ。空には高く白い雲がかかつてきただが、問題はなさそうだ。ただ、液体が大量に詰まつたザックがずしりと肩に食い込む。

所々に大きな釜のある滝があり、釣り竿を持つてきた近藤さん、古瀬にとつてはたまらない。いちいち竿を出すので、隊列に乱れが生じる。それでも大イワナを目撃した近藤さんは意に介せず執念を見せるが、残念ながらアタリはなかつた。

この日は3時間ほど歩いて清水沢出合の広いテント場に着く。タープ（という名のレジャーシート）を張り、焚き木集め隊とサカナ集め隊に分かれてそれぞれ活動開始。焚き木は順調に集まつたが、サカナは暗くなつても集まらず。それでも今晚の食事は小出で仕込んだイカ、鮭とばと牛肉たつぶりの牛丼で豪勢に。焚き火も遅くまで燃え尽きず、ビール、焼酎も尽きず。

8月19日

初日に重荷で歩き、またそれなりに飲んだので、少々だるい朝を迎える。しかもタープの下にシュラフカバーのみで寝たので、夜中にアブが襲来しボコボコにされた人も。

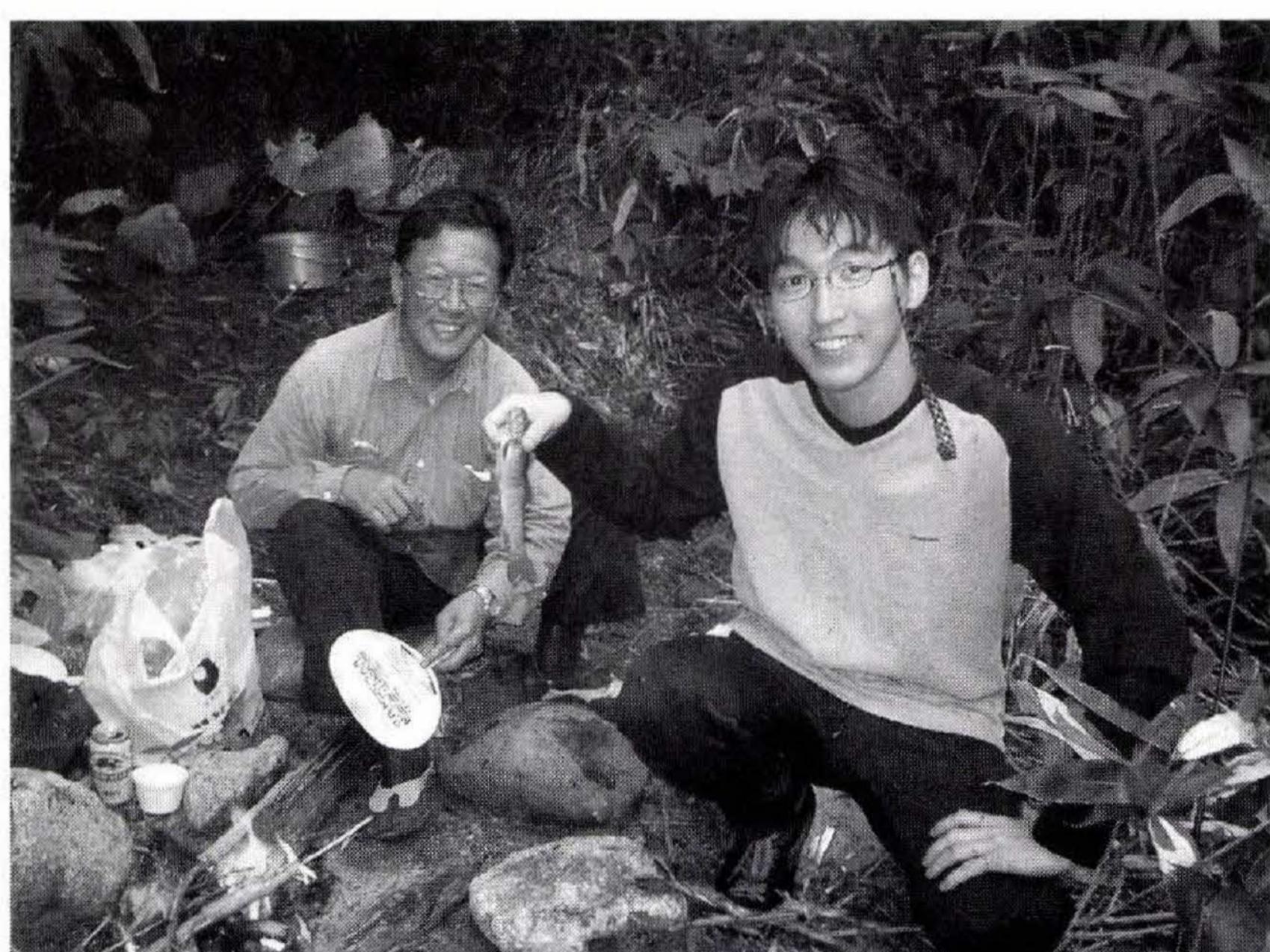
露を通して朝の光が射し込む中、濡れた渓流シユーズに足を突っ込んで出発。今日は長い行程になるが、魚を釣ることも重要なので、近藤さんと古瀬は朝からポイントに竿を入れる。しかしお互い達人には程遠い身分で、アタリはないわ、糸は絡まるわで時間がだけが過ぎていく。見かねた兵藤隊長は「オホコ沢まで釣り禁止令」を発令し、その後は順調に遡つていく。

沢は切れ込みが浅く、青い空が広々と見える。ナメ滝を踏みしめ、小滝を軽快に越していく。時折出てくる大きな釜ではへつりを楽しんでみたりもする。大きなザックとのバランスを取りながら、水線どおしにホールドとスタンスを探り、時には腰まで水に浸かり、各自が思い思いのルートを描いていく。時間が経つにつれ夏の陽射しが強まり、ブナやら広葉樹がきらきら光つて気持ちいい。

13時、オホコ沢出合に到着。全体の半分まで来たことになる。この先是次第に高度を上げ始め、水量は少なくなつてくるが、魚はいるらしい。釣り解禁となり、近藤さんと古瀬は竿を入れ始める。魚影はあるものの、いかんせんこの時間帯ではアタリもなく、少々焦りを感じ始める。

15時、少し天気が怪しくなってきた頃、小さなテント場を見つけ、タープを張る。昨日

釣ったヤマメを塩焼きに。  
前神（左）と古瀬



恼まされたアブはここまでくるとほとんどいない。釣り班にとつては最後のチャンスで、近藤さんは下流、古瀬は上流に分かれて釣りに行く。古瀬は暗くなる直前に一度釣つたが逃げられ、ほとんどあきらめかけたその直後、何の気なしに投げた竿にガツンと手ごたえを感じ、25cmほどのヤマメをGet。近藤さんも同じくらいのヤマメをGetし、お互いな

んとか面白を保つ。

夜は2匹のヤマメと田形さんが鳥取から持ってきた地酒で至福のとき。ヤマメは焚き火で塩焼きに。ホコホコした自身には臭みが全くなく、上品な味わいだつた。

### 8月20日

今日も朝から晴。コメツガが目立つようになり、針葉樹の香りが心地よい。実はこの先が非常に魚影が濃く、魚を追いかけながら遡る。今日中に下山、帰京の予定なので、ゆっくり竿を出せないのが何とも悔しい。水は少ないが、小さな滝にも大きな丸くえぐれた壺があり、この地域の冬の豪雪を想像させる。

この先もそれなりに登らせる滝もまだ多く、気は抜けない。軽い高巻きをしたところで、下降中に前神さんが滑って歯を折るアクシデントがあり、フォローできなかつた一同は反省。不幸中の幸いでそれほど痛まないようなので、先を急ぐことにする。

詰めは若干藪がうるさいが、水流を忠実にたどり、12時頃、花の咲く池ノ岳に到着。強烈な夏の陽射しに池塘がきらきら輝く。その向こうに平ヶ岳が大きく見える。近藤さん、田形さん、古瀬は平ヶ岳までの平坦な道を往復する。

13時、鷹ノ巣へ向け下山開始。積乱雲が気

になり、先を急ぐ。道は比較的よいがとにかく暑い。16時半に鷹ノ巣登山口に着。空は今にも降り出しそうになり、とりあえず最寄のヒュッテまでたどり着くと、とたんに雷と豪雨が始まる。近藤さんの車を恋ノ岐の出合に置いているので、古瀬がヒッチハイクで車を捕まえ、それに近藤さんに乗つていただき出合まで行つて車で戻つてきてもらう。その間一同は雨の中ヒュッテで待機する（近藤さんありがとうございました）。

落石を気にしながら林道を進み、トンネル経由で小出に出て温泉で汗を流す。今日中には帰京するため先を急ぎ、日付が変わった頃国立着。田形さんと私は新しく快適な部室でそのまま一泊し、翌日田形さんは鳥取へ、古瀬は自宅へ戻つた。大学通りの濃い緑が懐かしく感じられた。

### 8月27日

18時、浜松駅に集合。自転車で出向いたところ、

山田「えっ？ クルマじゃないのですか？」

鳥本「電車でいくんじゃないんですか？」  
……さつそくの以心「不」伝心なり。寮に戻り、クルマに乗り換えて浜松駅にて再度合流。まず、釣具・アウトドア用品店「上州屋」へ。山田氏の粋な計らいでライフジャケットをいたぐ。卒業祝いということである。卒業したのはもう半年も前だが。おまけに、今回のオ世話になりました（毎回ホントにすみません）。田形さんもはるばる鳥取から参加していただき、ありがとうございました。また行きましょう！

二人は浜松北部を目指す。向かう先は大入

## 卒業記念沢泳ぎ

鳥本 真司（平16年卒）

山域＝奥三河 新豊根ダム流域

大入渓谷ゴルジユ帶

メンバー＝山田秀明、鳥本真司

渓谷。運転手・鳥本のヘッポコMT運転に山田氏は思わずやきもき。途中、大衆食堂にて地元特産らしき「駿府丼」を食したが、これは値段が五百円と手ごろなわりに美味なり。桜海老、しらす、わさびの組み合わせは殊のほか絶妙だ。

国道473号から大入渓谷へとつながる県道429号へと入ると、まもなく「進入禁止」の電光掲示が現れた。道は塞がれており、山田「なんだこりや、先に進めねえじやねえか。今日はここで泊まりだな」

どうも台風の影響で、落石が多発している

ようだ。仕方なく、まだ入渓地点からある程度距離はあつたものの、そこでクルマを駐車させることになったわけだ。午後10時前後だったろうか。今晚はここで車中就寝だ。久しぶりの再会を祝して、乾杯。まもなく就寝する。

8月28日

4時半、起床。外はまだ暗い。そして、まだ眠い。気持ちを奮い立たせねば、と朝食のかつ丼をガツガツ。朝食を終えた山田氏は用をたしにでかける。すぐにクルマが一台近くまでやってきて、用たしもそこそこに戻ってきたところ……ハプニング！ 「うわああああああ……」悲鳴がこだまする。

車内から様子を眺めると、黒色の大型犬が彼に飛び掛っている。絶叫する山田氏……こちらが見たところ、襲うというか、じやれていたようを感じた。沢の水は、台風通過後ほんの数日にもかかわらず、美しく澄み通つており雑魚がいたるところでスイスイと泳いでいた。美しく、野性味のある沢だ。

この沢の特徴は際立つて「泳ぐ沢」であること。水の量、流れともに穏やかであるものの、深い淵がいくつも口を開いており、こうした淵をへつるのも限界があるから、次々とあつた。

さて、そうこうしているうちに夜も明け、徐々に明るくなってきた。必要な荷物以外はクルマに置き、出発。入渓ポイントへは徒歩30分程度。沢の左右をつなぐ橋がかかり、道にゲートが設置されているのが目印といえよう。入渓してまず思うことは水があまり冷たくないということだ。過去の記録でも「おしつこの混ざった子供用プール」のよ



奥三河・大入渓谷のゴルジュ帯を泳ぐ。

撮影・山田秀明

うな水温と表現されており、これは言ひえて妙なり。もつとも、進んでいけば場所によつては妙に温かかつたり、逆に冷たかつたりしていたよう感じた。沢の水は、台風通過後ほんの数日にもかかわらず、美しく澄み通つており雑魚がいたるところでスイスイと泳いでいた。美しく、野性味のある沢だ。

この沢の特徴は際立つて「泳ぐ沢」であること。水の量、流れともに穏やかであるものの、深い淵がいくつも口を開いており、こうした淵をへつるのも限界があるから、次々とあつた。

さて、そうこうしているうちに夜も明け、徐々に明るくなってきた。必要な荷物以外はクルマに置き、出発。入渓ポイントへは徒歩30分程度。沢の左右をつなぐ橋がかかり、道にゲートが設置されているのが目印といえよう。入渓してまず思うことは水があまり冷たくないということだ。過去の記録でも「おしつこの混ざった子供用プール」のよ

泳ぎ泳いで突破することになる。一方で、ロープを張るような滝は皆無であり、我々が進んでいる本流に対し、支流として流れ込む細い滝が風景的なアクセントになつてゐるのみである。

過去の記録から、この沢のポイントは通称

「小入道」と「大入道」の二つであると予測された。実際、第一の関門、「小入道」は両岸そそり立ち、暗く深い、この沢で最も威圧的な廊下である。もつとも、難易度はさほどでもなく、雰囲気的な部分が先行している感あり。ともあれ、ここを思い切つて通過すれば、この後連続する淵泳ぎの感覚がつかめてくるともいえる。

「小入道」のあとは深い淵が相次ぎ、次々と水泳を強いられ、体力的にはややハード。特に「小入道」直後の淵は距離が長く、コース中でももつともいやらしい場所かもしけない。だが、それ以上にいやらしかったのは、実は沢に生息する無数のアブだつたともいえようか。特に山田氏はこの沢のアブに好かれ、常に付きまとわれている状態で、泳いでいる最中に隙をつかれて刺されるなど相当悩まされた様子。

その後しばらくは平凡な沢歩きとなるが、150mと長い瀧をもつ「大入道」とその後の2つの淵は後半の正念場。たぶんライフ

ジヤケットがなかつたら体力的に、そしてそれ以上に精神的に辛くなつてくるはず。しかし、そこはライフジヤケット様々、深い淵の中にいても体が常に浮いていたりする状態だから余裕をもつて泳いでいる。本当にありがたい道具である。

遡行中はずつと快晴で、気持ちのよい沢登りが満喫できた。この沢は一部に暗い箇所があるものの、基本的に明るく開放的な雰囲気だ。沢はまだ上流まで続いてゆくが、「小入道」「大入道」ほかいくつものポイントで沢泳ぎを楽しみ、山田、鳥本ともに満足。適当なところで左岸をよじ登り、沢に並走する林道へと合流。1時間半ほどの林道下りをして、駐車場まで帰り着く。下り道は単調で、徐々に爪先が痛くなつてきてつらい部分もあつたが、蝉たちの大合唱にすぎゆく夏を惜しむ風情を感じ、心に潤いを与えてくれた。……そして忘れがたきは、前方でプリンプリンと揺れるおしり。……山田さん、いくら素肌の方が気持ちいいからといって、ビンぼつちやまスタイル（編注・身体のうしろ半分がむきだしの格好）は、やりすぎです。夢に出てきそ

2005年。7月9日。この土曜日はまだ梅雨が明けきつてはいなかつた。私は一人、芦安から広河原までバスで入り、そこからは大樺沢沿いの登山道を上がつている。

目的地は北岳バットレス第一尾根商大ルート。

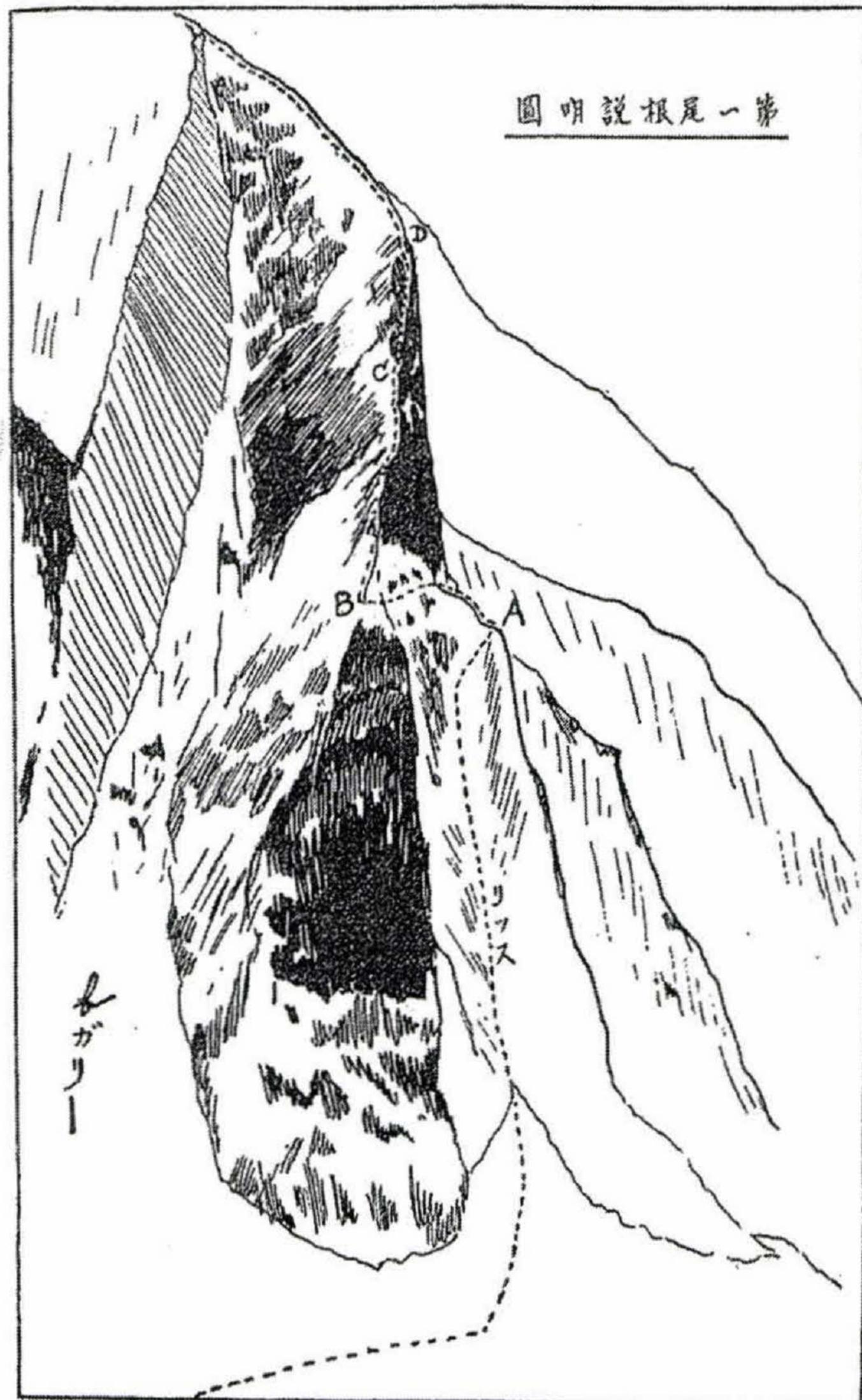
私が知る限りにおいては唯一の母校の名前がつけられ、また世間に認知されているところでもある。初登は1936年。9月8日。かの小谷部全助・森川真一郎ペア。

私がこのルートの存在を知つたのは大学四年の卒業間際であつた。このルートの存在を認識した時点でぜひ一度ここを登りたいと思つた。だが、残念なことに誰も付き合つてくれるわけでもなく、卒業後二年。せつせと技術を磨いてきた。そして、ようやく今回。今回も誰も付き合つてくれるわけではなかつたが、ある程度の自信をもてるようになり、単独で向かうこととした。

## 商大ルート

山田 秀明（平15年卒）

第一尾根説明図



『針葉樹九号』より

登山道から分かれ、バットレス沢を詰める。第一尾根に取付くためにはAガリもしくはBガリを詰めなければならない。Bガリー大滝。グレードⅢ級。つまり難しくはないということだ。実際、簡単なスラブから簡単なチムニーを抜け、再び簡単なスラブへと突入すれば黄色い花が咲く緩傾斜帯となり、一段落となるが緊張はする。

お花畠を通り過ぎると第一尾根末端壁基部に着く。この第一尾根には商大ルート以外にもう一つルートがある。というよりも、「正面壁ルート

」のほかに「商大ルート」があると言ったほうが的確な感じがするかもしれない。もちろん、第一尾根の初登ルートは商大ルートではあるのだが、そう言わざるを得ない理由についてではそこにいればわかる。つまり、正面壁ルートがまだスッキリしているのに対し、商大ルートは本当に岩屑のルンゼから取付くのだから。

ここか。ここなのか。ここから行くのか。なんとも、岩登りとは程遠く、まるで沢登りの詰めのよう。何度もため息ながらにチラ見をする。チラ見は凝視へと移ろい、そうなるとそれを受け入れる心境というより逆に積極的に愛着が湧いてくるのだから不思議だ。

見た目どおりの脆い「岩屑だらけの」ルンゼを登る。最近、こういう岩には慣れているので、登り方のコツはわかっている。押し付けながら登るのだ。それでも私が行けば落石は起こる。きっとビレイヤーがいたら生きた心地がしないだろうと思われるぐらい頻繁に。そうすると右側に残置ハーケンを発見。やはりルートは間違つてなかつたと安堵するとともに、普段は醜い残置ハーケンもこのルートにある錆々の代物は誰が打つたのだろうかと思いながら登れば、愛しくも感じられる。その後は概して簡単でグングン高度を上げる。ルンゼを終え、リッジに這い出れば、ハイマツ（A点）。藪漕ぎを30m、今度はボロボロのリッジになり、そしてさらに浮石しかないバンドを30m左ヘトラバース。そこで大テラスとなり、正面壁ルートと合流（B点）し下部は終了となる。

ここからは一転リッジを登ることになるのだが、この先のルートを観察してなんとなくガツカリしている自分がいる。これまでと違ひ、新品の残置ハーケンがやたら多く見受けられ、それがここからは「商大ルート」というよりも「第一尾根ルート」へとルート名が変わったような気にさせるからだ。とりあえ

ず心を落ち着かせ、ここまでルートを振り返つてみる。なんとなくただ怖いだけで、クライミングという感じがしなかつたが、別にクライミングの楽しさを追い求めて来たわけではない。だから、これもまた趣き深かつた。まだ半ばだが、余韻が残る。

しかし、まだまだ。なにしろ、雰囲気的には確かに商大ルートは終了したが、難易度的にはこれからが核心なのだ。

身の危険を感じるほどは脆くないリッジを30m行けば、多少ハング気味のルンゼ状のナイフリッジを眼前に。ハングしたルンゼのナイフリッジ。核心。ここである。なんとなく矛盾した書き方ではあるが、この表現がまつとう正しい気がする。確かに難しくはなさそくもつて、それは屹然としている。

『針葉樹九号』の末尾のほうにある初登記録。それはあまりにもさらっと書かれていて、それはなんともこのルートがあとで唯一の「冠」ルートになるなんて思わせる要素もないくらい、ただ行つたという事実が書かれているだけに過ぎないものだ。しかし、全助が書いたであろうその記録の中にもこの核心のところには触れていた。曰く「一ヶ所オーヴァーハングあり（C点）再三撃退された後やつと乗越す」と。この記述は私を迷わせるのに十

分すぎるものだった。踏んでる場数が桁外れな彼らでさえ躊躇しているところを私は一人で越えられるのかと。もちろん、決行したのはそれなりの目算があつたのも事実で、二人の頃と比べ確實に進歩した道具、特に靴に関しては、断然私のほうがいいものを持ってくる。そう思い込み、楽観的になつてここまで来たものの、これを目前にしたときにその道具への信頼は揺らぐものとなつた。結局は、ただ信ずるのみ。躊躇するもない、ただ行くだけ……。迷いを捨て、だけど確実に手を決め、足を置き、バランスをとり、小ハングを越えた。もう、ためらいもない。

そこを越すと、あとはもう困難などころはなかつた。もう50m登れば、実質的には第一尾根の登攀は終了だつた。思い返せば、クライミングとしては簡単であつたかもしけない。だが、しかし、余韻が流れる。そのため、あらゆる山々に一人喰入つて尚且深い自然の囁きに思ふ様胸を躍らせ得る山岳詩人の心境になりたい」と。

まさしく、商大ルートを登つてゐる間、私は、私自身はそういう心境に達してゐたに違いない。そしてこれからも、このときの感覚を何度も味わいたいのだ。

私は純粹なクライミングの楽しさを味わうために、ここに来たのではない。言うなれば、初登者の心意気に「シンクロ」することこそが目的だつた。初登者がいかなる心境にしてここを登つたのか、その心意気に同調するこ

これまでの登攀歴を振り返つてみると、私は明らかにクライミングが楽しいところへ出向いていた。それを今回はじめて、初登を意識することに主眼を置いた。あえて意識するためにも雄弁なパートナーを排したかったこともあり、単独で決行するのに二年を要した。そしてその結果、存分なまでに、その目的を達成できたことは言うまでもない。会心の山行とはこのようない山行をいうのだろう。

小谷部全助は『針葉樹八号』にこう書いて

いる。

「あらゆる山々に一人喰入つて尚且深い自然の囁きに思ふ様胸を躍らせ得る山岳詩人の心境になりたい」と。

伊藤助成君追悼

中村 正司（昭28年旧卒）

昭和27年の涸沢夏合宿は、彼にとつて印象深い山岳部山行であつたと思う。新制度第一期生の彼は、旧制の我々と比べて一年短縮されて翌年は同時に卒業するという慌しい頃である。ふらつと入部し部室改修の寄附集めと併行して、夏合宿の準備（一ノ倉グリセード訓練）などに彼は参加したが、酒豪でもあって新参部員とは思えぬ楽しい仲間となつていた。

夏合宿は先発隊テントに落石事故があり、その救援や、太田（可）教授が涸沢まで同行するというおまけ付きとなり、彼にとつて忘れ難い山行であつたと思う。秋田出身で酔うと「なまり」が激しくなり、種子島出身の南竹君（現高崎氏）とふるさと弁で会話するという余興に、一同笑いこけたものである。

卒業後はお互い会う機会もなかつたが、私が退職して油絵個展を開いた折に、彼は経団連会議を了えて飛んで来てくれたのが再会の始まりとなつた。幼い頃から覚えたスキーと山岳部を結んだ「山スキー」なる境地を生涯の趣味にしたようで、興奮気味に語ってくれたものだ。

・

勝田有恒君を悼む

石原 僕（昭30年卒）

ところで最近「山」を通しての思いもよらぬ逸話を知つた。私の親しい唄教室の仲間で元大学教授でもあつた男が、伊藤君と一緒によく山行したというのである。よく聞くと、

その実兄が日本生命で伊藤君の後輩でもあり、弟の彼もいつも誘われていたということだ。後日その実兄は伊藤君の後任の社長となつた由、弟であるその男から報告があつた。彼特有な環境の中で、生涯貫ぬいた山男ぶりに私は心を打たれたものだ。

同期の中でも最も元気そうだった君が、最初に逝くとは今だに信じられない。

4年生の秋に、肺を患つて鹿児島に帰る君を東京駅で見送つたのが、つい昨日のように思い出される。

同期は、須山・白川・奥野に私で、君だけが高校山岳部の経験はなかつたのに、部室に来る新人は、みんな君が最上級生だと思つたそうだ。翌年になると、甘利等今のオーショーン会メンバーが加わつて、一段と賑やかになつたが、何時の間にか我々の一学級上の先輩がいなくなつた。今だに昭和29年卒は名簿上空欄になつてゐるが、これが君のマネージャーとしての苦労を倍加することになつた。

君の冬山での想い出は、昭和28年3月の上高地周辺に集中していると思う。善六沢の底まで200メートルは流されたが首だけ出でて本当に良かつた。逆さま

だつたら後の法学部長を一橋は失うところだつた。

出発前、大塚・山田両先輩から「2年生、1年生だけになつた君たちは、岳沢生活でもして、じつくり勉強しなさい。西穂から奥穂へなどは無茶だ」と叱られたので、『針葉樹11号』にも書けなかつたが、既に西穂小屋に荷揚げが済んでいたのだつた。

スキーで斜面を切り、トップの甘利は残つたが2番手の君が落ち、3番手の須山はブツシユに引つかかつたのが幸いした。

ショックの回復と猛反省の後、ワカンで尾根通しに往復して荷を下ろし、誰もいない岳沢左岸の高台に、戦前から唯一残されたワインパーを張つた。(これに入りきれない十数人はスキー合宿だつた)

ところが、部室では良く燃えた古いラジュウスが鼻づまりで火が点かない。僅かなアルコールを使ひきつた後は、登る為生きる為に、灯油を空缶の中で燃やしたので、鼻の中まで真つ黒になつた。資金・装備の充実と2年生への集中した技術訓練がどれほど大事かを痛感した合宿だつたが、誰よりも寒さに不慣れだつた君は苦労したと思う。

その経験を背景にして、28年度針葉樹会総会に年会費制度の導入をOBの皆さんに提案した。從来、ごく偶にお願いしていた寄付を

毎年振り込みにして下さいという話だから、「寄付集めがたいへんか?」「会費は何時まで続けるのか?」などの質問があつた。しかし、君の明確な答弁に加え、他校の実状も知る日押しのお陰で、会費というよりも寄付感覚での大きなご支援を頂戴することが出来た。

今にして思えば、朝鮮動乱の特需が失われた後の不況があり、さらに、29年には賃下げというケースまであつた時期に、よくぞここまでご協力願えたものと感じ入つてゐる。

29年夏、奥又白を経由した2・3年生が涸沢に合流した後、北尾根で外語大のチーフに「お宅は金持ちだな」といわれたが、当時は珍しいオレンジ色天幕の集団は涸沢中に異彩を放つていた。

金持ちと言えば君がそうだつた。軽井沢の某所に古い追分宿の写真があるが、そこに写つてゐる子供はオレだという話を聞いたことがある。戦時に別荘暮らしどは豪勢だ。山岳部時代は、鹿児島の銀行頭取である父君から離れ、五反田の邸宅でお手伝いさんと2人暮らしだつた。その応接間で、須山と一緒に、君の好きな曲を繰り返し聞かされたが、お陰で「ブルツフのヴァイオリン・コンチェルト」が私の好きな曲の一つになつてゐる。

法制史という地味な分野で学校に残つた君

のその後は知らないが、お互に第二の人生に入つてから、新所沢で一杯やつた折りに「文部省の輩に、こう言つてやつたよ」という君の弁舌を久しぶりに聞いた。今にして思えば、君は若い時から、とうとうと喋つても威張ることがなく、シャイな笑いを浮かべるのが、育ちの良さを示していた。

そんな君と今は会えないのが残念だが、良い機会だから、50年前にお世話になつた先輩方によろしく御礼を申し上げて欲しい。

(追伸) 8月31日の昼過ぎ、私と女房は木曽駒の頂上で、乗鞍・笠・穗高・槍を眺めていたが、丁度その頃、春日井君が君の所に旅だったのを帰宅して知つた。つい2カ月前に、彼は「シリク・ロードの旅は続ける」と言つて

いたから、真っ直ぐ西方淨土へ向かつたかもしない。

長い間忘れていたが、彼が唯一の高校時代からの後輩だつたことを急に思いだした。君もそうだが、義理や利害に関係なく気軽に話せる仲間を失うのは辛いことだ。

## 牛ちゃんを偲ぶ

中川 滋夫（昭36年卒）

牛ちゃんこと小林進二君（昭36年経卒）が  
本年5月14日帰らぬ人となつた。68才。

上州・赤城山の麓で生を受け、前橋で育ち  
高校は進学校でも有名な前橋高校。硬式野球  
部に属しファーストで四番。のちに中日ドラ  
ゴンズのセンター、一時監督もやつた「中」  
が三番で甲子園を目指したが、惜しくも果せ  
なかつた。2002年、母校が夏の甲子園に  
出場を決めた時、故郷・前橋に帰つていた牛  
ちゃんは後援会の会計幹事をつとめた。母校  
が勝ち進むと、「金がかかって大変だよ！」と  
ぼやきながらも嬉しそうだつた。

大学時代ソフトボールでの打球は矢張り群  
を抜いており、センター中心に鋭いライナー  
を飛ばしていた。「野球部に入らないで、どう  
して山岳部なんだ？」の問に対しても「野球  
はもういいよ」と、ちょっとヒネたような返  
事しか返つてこなかつた。バッティングはと  
もかく、肩の強さ、足の速さに自信がなかつ  
たのかも知れない。牛ちゃんがド真剣に走つ  
ているのを見たことがないが、とりわけ速い  
というイメージは湧いてこない。

一橋に入学し直ちに山岳部に入部。黒の詰  
襟の学生服がよく似合う、どこからみても地  
方出身とわかる学生であつた。入部早々、上  
級生から「ギューチャン」というニックネー  
ムを頂戴した。これは当時人気の新聞小説、  
獅子文六の「大番」の主人公「ギューチャン」  
に風貌・雰囲気がそつくりということでつけ  
られたもので、部の内外でギューチャン、  
ギューチャンと親しまれながら呼ばれた。

四季を通じて合宿に参加、野球とスキーで  
鍛えた体は、みかけに寄らず柔軟で、岩登り  
はていねいにバランス良く登り、積雪期は雪  
をだましまし登るのが上手だつた。彼の山  
に対する取組姿勢は「慌てず・騒がず・気負  
わず・自然と調和しながら登る」といった感  
じで、その場、その場の状況判断も極めて的  
確で危なげを感じさせない安定感のある登り  
方であり、信頼できるザイルパートナーで  
あつた。

第四尾根一大賀・小林。取付前にギュ  
ちゃんが足を滑らせひっくりかえり、一回転  
して（？）うまいぐあいに石に腰掛けた。  
ギューチャンの話では、第四尾根の収穫は、  
このアクロバットだけらしい（『針葉樹12号』  
より）

剣・穗高・後立山そして地元上越の山々に  
数々の足跡と記録を残した牛ちゃんだが、特

筆すべきは彼の存在感であろう。牛ちゃんの  
存在はチームのメインプレイヤーであると同  
時に人間関係の調整役もあり、彼の存在そ  
のものがある種独特のなごやかな雰囲気をか  
もし出すのであつた。その一例としてミミさ  
ん（峰高教通昭35年卒）の一文をお借りし  
たい。

「バットレスで二三日の岩登りを楽しもう  
と、初めてみる壁をあおぎながら何か懐かし  
さを感じながら、八本歯沢をにぎやかに下つ  
た。夜、牛肉のテリヤキ、ギューチャンのう  
まそうにぱくつく顔は忘れられない。筋のあ  
る肉なのでなかなか噛みきれない。肉を噛  
み切ろうと苦闘する顔が、ローソクの光であ  
やしく変化し、それがまたおもしろい。ギュ  
ーちゃんが足を滑らせひっくりかえり、一回転  
して（？）うまいぐあいに石に腰掛けた。  
ギューチャンの話では、第四尾根の収穫は、  
このアクロバットだけらしい（『針葉樹12号』  
より）

ゴルフはシングルプレイヤーであった。個

性的といえるバツクスイングで軽く打つていいのに、ボールを芯で捕えているのかよく飛んだ。パッティングは真直ぐティクバツクせずに、ヒヨイと上に持ち上げるようにティクバツクしコツンと打つ独特の打ち方で球足がよく伸びるボールを打ち、いやらしい程カツブインさせた。ゴルフでの付合いはここ五、六年のことと、小生の最後の海外駐在地シンガポールにも永井、三股、遠藤諸兄と共に来星し、インドネシア・シンガポールでプレイして以来、年二三回プレイし鎬を削った。

中でも記憶に残るのは、2002年三井の森蓼科でのプレイで、牛(44・41) 中川(43・42) のデッドヒートで、一緒にラウンドした別荘族の二人から、「よく飛びますね。運動は何かやっていますか?」と聞かれた牛ちゃん「我々は山岳部仲間です。高原ゴルフはよく飛びますね」とスマシて答えていた。牛ちゃんのホームコースは赤城ゴルフクラブ。ゴルフ場造成の際、牛ちゃん所有の山林が一部ひつかかっていたので、ついでにメンバーになつたとか云つていたが、クラブライフを十分楽しんでいる様子であつた。

野球、山、ゴルフ、囲碁と多方面で活躍し存在感を示し、楽しませてくれてありがとう。もう少しつきあつて欲しかった……。

最後に彼が学生時代部誌にのせた「夏恋し」と題する詩で往時と彼を偲びたい。

### 夏恋し

バツクしコツンと打つ独特的の打ち方で球足が

実に良い天氣である。

よく伸びるボールを打ち、いやらしい程カツ

濃く厚くなつた緑の奏でる音楽も楽しい。

六年のことと、小生の最後の海外駐在地シン

ガポールのうまい季節となつた。

ガポールにも永井、三股、遠藤諸兄と共に来

早く夏休みにならないかなあー。

星し、インドネシア・シンガポールでプレイ

コーヒーも忘れ、政治も忘れ、

して以来、年二三回プレイし鎬を削つた。

勉強も忘れる夏山。

シゴカレの夏山。

アノ冷い水、タルンダ気持をひきしめる水。

アノまずいメシ。

そして岩登り、グリセード。

それにして多すぎる涸沢の人出。

静かで、強烈な、夏山がほしい。

牛

(『針葉樹13号』より)

二〇〇二年五月、残雪の日光・男体山にて。  
左から、大、小林、中川



## 牛チャンと共にした山旅

石 弘光（昭36年卒）

牛チャンと初めて会ったのは、山岳部の新入生歓迎コンペの時だつた。1957年4月、憧れの一橋大学に入学。大学生になつた最大の喜びは、受験から開放され山に思う存分に行けるといつたことであつた。入部を希望した新入生の中に、同じような思いの連中も多かつたのであつた。山岳部の狭い部室は新入生十数名を加え、はちきれんばかりの状況であつた。私のすぐ横に座つていたのが、牛チャンであった。一見年配のおっさんふうで、てつきり上級生だとばかり思つていた。自己紹介の折、高崎の出身で高校時代は野球をやつていたがこれからは山登りがしたいといった話があり、私はやつと同じ仲間だと分かり親しみを覚えた次第である。

当時、「大番」という映画がはやつており、その主人公が牛チャンであつた。確か市畠さんか山チビさんが主人公の風貌がそつくりだとして、牛チャンなる名を付けたのが事の始

まりである。彼自身このニックネームがすっかり気に入つたようで、それ以来もつぱら牛チャンを名乗ることとなつた。

4年間の部活の間、私の同期生の集まりであるヤロー会の中で、牛チャンが一番合宿に参加した回数が多かつたと思う。それだけ彼は、山に打ち込んだということであろう。私も牛チャンとは、随分山行を一緒にしたという懐かしい思い出を持つてゐる。その中からいくつか、思い出を語ることにしたい。

牛チャンの頸には、よく見ると小さな切り傷の跡がある。これは一年生のときの夏山合宿で剣岳へ行つたときに、雪渓でスリップし自分のピッケルで切つた傷跡である。私と牛チャンだけ、剣沢のテント場を確保するべく先発隊として、市畠さんと景山さんに連れられた本隊より数日早く入山することになつた。ボツカの荷物はゆうに40キロは超えており、生まれて初めて背負う重荷だけにいささか難行苦行の体であった。急ぐという理由で、途中荷物をデポし少し軽くしてもらつたものの、雷鳥沢の急登にはいささか参つたものだ。剣御前から剣沢に入り雪渓に足を踏み入れたときに、牛チャンが数メートルスリップ。ゆるい斜面であつたために自力ですぐに止まつたが、顎から血が吹き出していた。剣沢小屋で簡単に治療してもらつただけで、その後の合

宿での行動に一切支障を来たさなかつたのが牛チャンであつた。流石は牛チャンと感心したものだ。私なら間違なく氣力が萎えてしまつたはずだ。

それから牛チャンは、白馬の大雪渓を下降中、シュルンドに飛び込みあわやといったアクシデントも引き起こしている。3年生の夏山合宿で、剣沢での定着のあと後立山連峰の縦走に移つた。針の木から白馬山頂をきわめ、最後の下山路を大雪渓にとつたときである。入山して3週間ほど経ちやつと下界に帰れると、自然に先を急ぐ形になつた。夏道はいさか回り道なので、皆で雪渓の上をグリセードで降りることにした。だいぶ下つた頃、前に行く牛チャンが雪渓上、突然に私の視界から消えてしまつた。急いでそのあたりに行くと、牛チャンは雪渓を踏み破り首だけだし、「落つこつちやつたよ」といいながら雪が一杯に付いているメガネ拭いていたところだつた。彼の足元には深いシュルンドが、口をあけており雪解け水がごうごうと流れていった。彼はその端にひつかつていていたのだ。メガネ拭き終わりよく見えるようになつた牛チャンは、改めて自分の足元を見て「あそこに落っこつたら助からねえ」と照れくさそうにビビッタ声を出したのを今でも鮮明に思い出す。

それからもう一つ、冬山で常念乗越に張った前進キャンプに大吹雪のために後続の本隊から引き離され、牛チャンと大賀の三人で一週間ほど閉じ込められたことがある。食料も燃料も次第に底をつきだし、一日でやる仕事といえばテントに積もる雪をかくことぐらいで、よくまあ凌いだものだといまも感心している。人間社会から隔離された世界に、長い間仲間と3人で身を置くなんて、山での生活以外では考えられない貴重な経験であった。牛チャンのカンパンで作った将棋で時間をつぶしたのも、いまとなつては楽しい思い出である。



昭和35年7月、雲の平にて。  
小林(左)と三股

## 昭和35年の夏合宿

小林 正直(昭36年卒)

「二種類の薬を飲んでいるんで酒を飲むと目がチカチカするんだいね」といいながら牛ちゃんは車を運転してくれた。平成15年2月アリちゃんとショーティと一緒に、いつも牛ちゃんが東京に出てくるから、たまにはこちらから群馬に出向いてうどんで一杯でもと思っていたことが実現し、彼の運転で水沢うどんを食べ、雪が積もる道を榛名湖まで案内してもらい水墨画の世界を堪能した。2月の頃は癌細胞が進行し治療法もなかつたのだろう。それから三ヶ月後に誰にも知らせず「あばよ」と逝ってしまった。牛ちゃん何かとありがとう。

わたしは二年から山岳部に入部したが、その動機に前期は牛ちゃんと同じKクラスだったこともあった。早速、谷川やら岳沢合宿に連れて行つて貰つたが、山の経験が一年違うということの差は大きく、その上に体格が貧弱な私には一回り大きな彼の馬力には及びも

つかず。

ヤロー会は中島が平成10年に他界し、今年平成17年には牛ちやんに去られてしまった。

山登りの技術的に劣る私を引き上げ盛り立ててくれた二人だった。レベルが違っていたせいか牛ちやんと二人だけの山行や岩登りはなかつたが、昭和35年の三人の夏合宿縦走後半は今でも楽しい思い出だ。

この夏合宿は私用で一回下山し数日後再度入山し涸沢合宿に合流した。定着合宿の後、

7月24日中尾峠、笠ヶ岳から双六を通り、ここで立山縦走グループと雲の平・薬師沢を渡り剣沢の延長戦組に合流するグループの二つに分かれた。後者は牛ちやんと中島と私の四年生三人だけ。念願の雲の平を通り薬師沢の出合い、太郎山の中腹、五色ヶ原で泊まり、7月31日剣沢のクローリー会が主体の延長戦組と合流した。8月1日、牛ちやんと私は強化合宿組のボッカを三ノ窓まで、中島は三ノ窓に入る。大賀が富山経由で入山。2日は牛ちゃんと大賀は三ノ窓へ。私はチンデン。16時頃牛ちやんと中島が剣沢を登ってきて「撤収して地獄谷に下ろう」という。房地荘は満員で廊下に寝かされる。翌日は朝食も取らずに宿を出、富山から私の実家の長岡へ三人で向かい、その夜はボロ家で長い合宿の汚れを落とす。

(注)

杓直(しゃくちょく)、虞平(ぐへい)、  
樂天(らくてん)は人名

し夕食とビール一人2本飲み、一休みの後タクシーを呼び信濃川縁で長岡祭の三尺玉を見物。翌3日二人は上りの急行「雪国」で帰つて行つた。

この長岡泊まりには、後日、大賀から「おれも一緒に誘つてくれればよかったのに」とクレームがつき、今でも心に引っかかっている。さらに、後から母から聞いた話だが、夕食のご飯が足りなくなり近所から調達したといふ。三人でそんなに食つたか、今となつては思い出せない。

45年前の楽しい夏合宿を憶うにつけ中唐の詩人白居易の「商山の路にて感有り」の心境である。

あの元気なギューキちゃんが逝つてしまつた。ある程度は予期していたことだつたが、現実となつてみると非常に寂しく残念で仕方がない。4月に様子が知りたくて電話したが留守電だつたので会社の電話番号を言つて電話して欲しい旨伝えた。暫くして、携帯が鳴つたので出るとギューキちゃんだった。

会社の電話番号がはつきりしないので携帯に掛けたとのことだつた。非常に元気な声だつたのでゴルフでもやりたいねと言つたところ、もう歩けない状態にあり痛み止めにモルヒネを打つていてこと、医者にはもう何ヶ月ももたないと言われていることを告げられ返す言葉も無かつたことを思い出す。

5月に入り、奥さんより5月14日ギューキちゃんが永眠した旨の葉書を頂いた。

三股 宏(昭36年卒)

## ギューキちゃんの思い出

以下冥福を祈りつつギューチャンの思い出を書いてみる事とする。

### (1) 海外での出逢い

大学を卒業してギューチャンは日本合成ゴムへ小生は伊藤忠商事に入り、お互いに忙しかったこともあり、10年以上も会うことはなかった。小生は1973年から1975年までソウルに駐在したが、たしか1974年の暮れ頃だつたと思うが、ギューチャンから電話が入つた。確かな記憶はないが夕方5時近くではなかつたかと思う。「今ホテルに居るが6時からミーティングがある。顔を見たいので来て欲しい」とのことだつた。さつそくホテルに出向き、久々に顔を合わせたがゆつくり話をする暇はなく、別れ際にホテルのギフトの果物を貰つたことを思い出す。

1975年11月にソウルから帰国し大阪本社で纖維製品輸入の担当となり主としてアジア地区の輸入を手がけたが、1980年前後にインドに客先バイヤーと一緒に製品の買付けに行つたことがあつた。その時はニューデリー、ボンベイ（現在のムンバイ）を廻つたがボンベイでは海岸に近いオベロイに泊つた。朝食を取りに食堂に行つたとき『三股じやないか』と声を掛けられ見るとそれが

ギューチャンだつた。この時も連れがいたのでゆつくり話しをする暇は無かつたが、正に奇遇だつたと思う。

その後、1984年から4年間コロンボ（スリランカ）に駐在したがこの時はギューチャンに会う機会は無かつた。コロンボより帰り新大阪の近くにあつた染工場に出向していた時に大阪で会議のあつたギューチャンから電話を貰い食事をしたことがあつた。「日本ではあまり逢うことがなかつたが、海外のソウルやインドくんだりで逢つたことがあつたなあ」と話したことを思い出す。

最後のゴルフとなつた。

この時、ギューチャンが「医者からもう1年持たないとと言われている」と言ったことを思い出す。

### (3) ヤローー会山行とギューチャンの思い出

2003年7月にヤローー会で草津に行つたことがあつた。夫婦で参加しコバショウ（小林正直）を山に連れて行く会で永井が幹事をやつてゐる。2001年4月より現役に戻つたのでなかなか参加することが難しかつたが、この時は我々夫婦も参加出来た。当然のことながら、ギューチャン夫婦も参加していだ。帰りの日ギューチャンの車で白根山ドライブウェイを案内して貰い草津駅まで夫婦で見送つてもらつたことをなつかしく思い出す。

以上でギューチャンの思い出は終わりとするが、来年6月フリーとなつたら前橋に墓参りに行こうと心に決めている。

2002年3月に中川のメンバーコースの青梅で、10月にギューチャンの本拠地赤城でやつたが、2004年7月青梅でやつたのが最後のゴルフとなつた。

## 牛ちゃんを思う

永井 新也（昭36年卒）

5月初め、25、26日に行うヤロー会の「小林（正）と山へ登る会」の出欠の確認と体調を尋ねる為ギューチャンに電話をした時、「病状が）だんだんと中島の末期に似て來た」といつもの淡々とした調子で話をしてくれた。小生はその意味がわからなかつた。一時的に悪いだけで、病床に臥して電話しているとは思わなかつた。

ところが「登る会」の前日奥様よりの葉書で彼の死を知りビックリした。こんなに早く別れるとは思つていなかつたのでお見舞いにも行かなかつたことが悔やまれてならない。「登る会」では26日茶臼岳に登り、山道でメンバー全員で黙祷を捧げ彼の冥福を祈つた。

ギューチャンは長い闘病生活で苦しい事が多かつたと思われるが、いつも飄々として物に動ぜず、病氣である事を我々に忘れさせるものがあつた。去年は皇海山へ登つたと話していた。

## ギューチャンと一緒に

山本 尚禎（昭36年卒）

二、三年前、彼を訪問した際貰つた鉢植えのアロエが我が家で元気に育ち、小生の健康に役立つてくれている。小生の所属する合唱団ではこの九月にモーツアルトのレクイエム、シューベルトのミサ曲の演奏会を行うが、その時はギューチャンよ安らかにお休み下さいと祈りつつ心を込めて歌いたい。

\* 昨夜、車の中で考えた事は「ギューチャン」のことだけだった。昨年のヤロー会の忘年会。「4月にあと一年の命、と言われたよ」と、ギューチャン。

誰の事を言つているのか、と思わずギューチャンの顔を見ると、「医者に言われてしまつた」……なんと返事してよいやら……「嘘だらう？」と平凡な事を小さい声でしか言えない俺。

ギューチャンが20年以上前から癌と戦っている事は承知している。

「うちのカミサンがね、何処で調べたか、手術は良いが、化学療法は絶対駄目、と医者に言つたんだよ」「癌の化学療法は副作用が多い割に、治る率が低いんだ。カミサンに感謝しているよ」エコノミスト村の中島の別荘へ向かう車の中、助手席のギューチャンが一人で話し出した。中島が亡くなる二年前の甲州街道だつた。中島の病氣には、自分の闘病経験を交えて説明してくれた。

また数年前大町の中島君の別荘でヤロー会を開いた時、宴会後団地内の集会所に分宿したギューチャン、有賀、小生の3人が、深夜の風呂場で歌を唄いまくつたことがあつた。

ギューチャンはその時ガンの手術を受けていた事を後で知つた。

昨日停めた戸隠神社奥社駐車場より歩き出したのは、午前3時半を過ぎていた。11時に戸隠牧場で待つ仲間と会いに、戸隠山経由で牧場へ歩き出した。

世界。

昨夕停めた戸隠神社奥社駐車場より歩き出したのは、午前3時半を過ぎていた。11時に戸隠牧場で待つ仲間と会いに、戸隠山経由で牧場へ歩き出した。

戸隠神社奥社への参道の中間、随神門の辺りで急に大粒の雨が降り出した。日の出には小一時間ある。真つ暗な中、門内の石に腰掛け、ギューキちゃんを想う。

\*癌との闘病は間違いないが、癌を征圧したから、あと一年の命と平氣で言えるんだ。人間、余命の期間を宣告されて平氣で他人に言えるものか、と思いなおした。

数年前の8月にはひと月に8回もゴルフを楽しみ、有賀と三人で剣御前小屋から田圃沢へ行つた時には黒部平で三人、美味しい酒を飲んだ。痛飲、いや快飲という言葉があればこの事を言うのだろう。これが癌と戦っている姿とは思えないギューキちゃん。

随神門でギューキちゃんのことを持つて、30

分も時間が経つた頃、空が薄くではあるが明るくなってきた。雨も止み、再度歩き出した。

\*昨年の忘年会の言葉が気になり、2月にコバシヨウ・アリちゃんを誘い前橋へ行く事にした。ギューキちゃんに会いに行く目的を何にするか?……

前橋に住むギューキちゃんに、本当のことが言えず、前橋行きの目的を、榛名山名物の水

沢ウドンを食べに行くことにした。2月18日、快く承知してくれたギューキちゃんは高崎駅まで自分で車を運転して迎えてくれた。俺が運転を代わろうか? と聞いても、運転している時は平氣なんだと、ギューキちゃん。運転しながら「ショーティーはマニュアルシフトの車を運転しているんだよな」と。それ以上は言わない。何かの意味がこもつてているようと思えたが、あとが続かない。

戸隠神社の奥社に着いた時はすっかり雨もあがり、日の出時間も過ぎていた。参拝後出发したのが5時丁度。社務所横より登りだす。林の中の道は先ほどの参道と違い登山道。それでもギューキちゃんのことが頭から離れない。

戸隠山の稜線は五十軒長屋から岩混じりになる。河原の小石のような角が取れた小石が固まつた水成岩。鎖が要所に固定されてある。登山者は誰も居ない。緊張して登りきると、八方睨 7時20分着。此処からは背の高い草が両側から覆う稜線の道。岩は無い。全身が草露で濡れる。左前方に高妻山のピラミッドが綺麗だ。

岩場から土の道になると、又ギューキちゃんから2月の水沢のウドン屋での写真が送られてきた。「この嬉しそうな笑顔、天下一品」と裏書されていた。水沢で飲んだ二時間の美味しい酒の肴は天麩羅一皿、ギューキちゃんから「5月の那須のヤロー会では、久しぶりに飯盒炊爨をしよう! 飯盒は俺が持つていて」と提案があった。那須の飯盒炊爨のメニューは俺が作ることにした。

それから間もない日に、有賀から電話。

ギューキちゃんが相当悪いらしい、水沢でギューキちゃんは薬を飲んでいると言つていた、との事。早速ギューキちゃんに電話。「薬はモルヒネだよ。ひどい人は大量に飲むから直ぐ眠くなる。俺は少ししか飲まないから、飲んでから四時間くらい後で眠くなるんだ。那須行きは平氣き」……まるで他人事のように自分の病状を言うではないか。

あわてず、今までと同じようにゴルフをし、酒を楽しむ。死ぬ一ヶ月前の3月のゴルフの回数が三回に減った事ぐらいが変わった事だ。人間死に際までこのように冷静に日常生活を送れるものか!?

戸隠山稜線、一不動の避難小屋で、初めて登山者と出会う。9時15分。これより戸隠牧場への下山だ。沢の中に道がある。滑滝にはトラバース出来るよう鎖が完備している。この辺りから、高妻山への登山者が多くなる。「何処から来ました? お年なにお元気ですね!」

「お年なのに」と他人に言われる自分に気づき、自分の年齢を数えなおす。

又ギューチやんの事が頭をよぎるのを押さえ、沢道を下り、牧場に続く平地に出る。遠くに牧場の柵が見えてきた。

\*死に対して平常心を維持し続けたギューチやんの事が知りたくなり、「死」を見つめた本を読み出した。『看護婦が見つめた人間が死ぬということ』『そして妻は「ハッピート』と言い遺して逝った』を読んだ。その本の中に、ある修道院のシスターは、死を前にどんな醜いおのれをさらそと神は許してくれると信じて死んだ、とある。長年の信仰生

活で鍛えた人でさえ、死の間際には、この自分でさえ良ければ、という利己主義の例。

これに比べ、無宗教のギューチやんの立派な死の方。

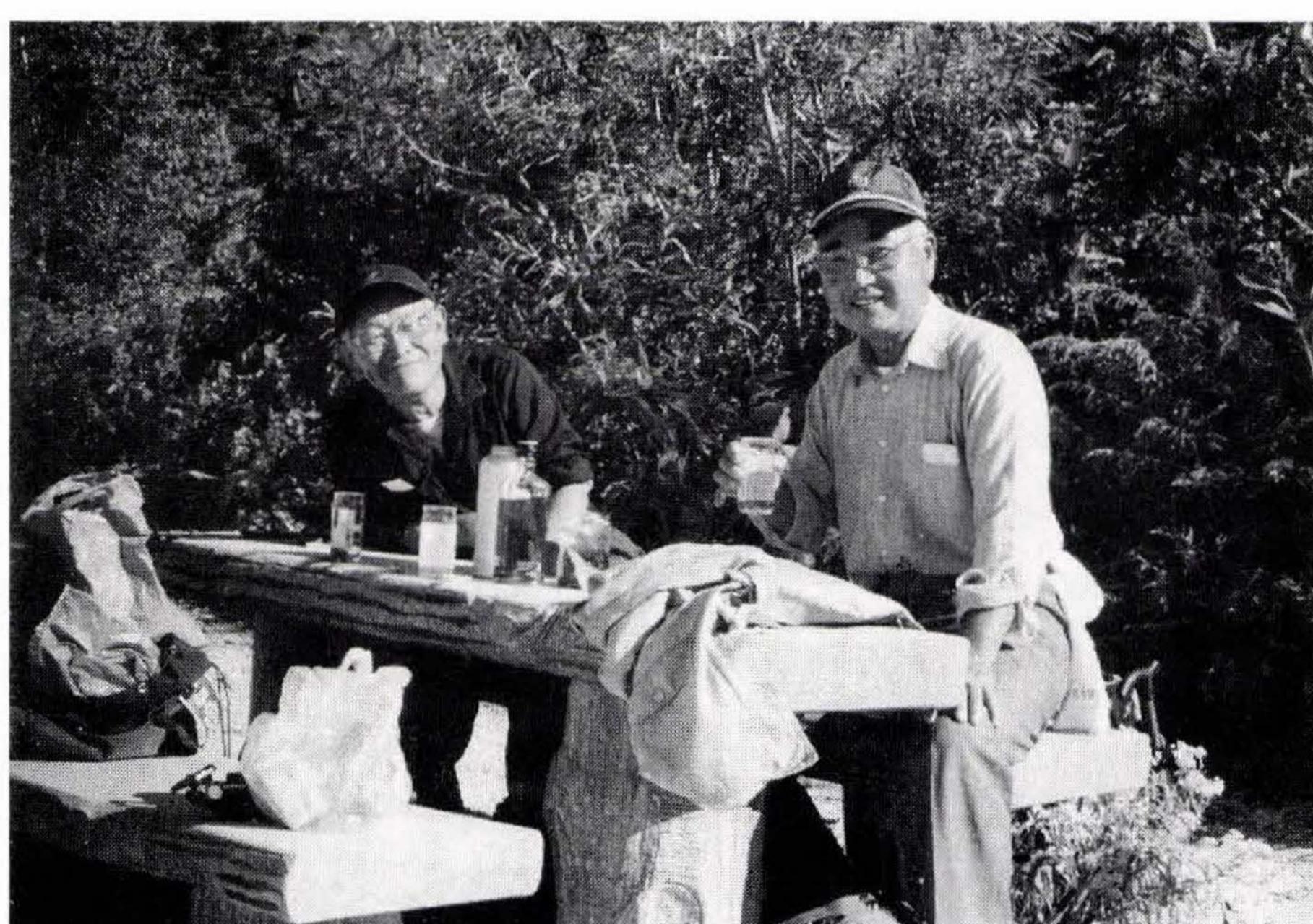
牧場入口で戸隠遭難対策協議会の人、登った山の登山計画書を書かされた。

『平成17年7月23日 奥社5時発、八方睨7時20分、戸隠山7時30分、牧場10時30分着』と書く。早いですね! と言われ、嬉しくなった。これもギューチやんと一緒に登つたおかげだろう。

ギューチやんとの最初の出会いは、昭和32年4月、部室での新人歓迎コンパ。それ以来だ。君と出会えた俺は幸せだった。48年間も有難う。これからは俺の中で生きてくれ。この48年間に比べたら、俺の余命も知れている、すぐに追いつくよ。その時にはギューチやんの逝き方を真似させてくれ。しかし、残念ながら俺には、ギューチやんの真似の一つもできる自信がない。

それなら俺は、これから的人生で「今現在が一番若い時」「今を大切に」「その若さを發揮して」生きて行こう。好きな酒を飲むのも、その一つ。今日の酒の仲間のいる戸隠牧場キャンプ場へ早く行こう。

二〇〇二年九月、黒部平にて。  
山本(左)と小林



## 二月会通信

■5月16日

【出席者】 石井左右平 山崎擴 有賀盈 三

井博 高橋信成 竹中彰 本間浩 西牟田

伸一 山本健一郎 (文責 山本)

\*佐薙さんと上原くんは鹿島槍、蛭川くんは名和くんの運転手をするのでお休みです。

### ●山行報告

石井 山崎

平塚に越したので近藤さんの古戦場大磯の高麗山に行つた(近藤さんは毎朝高麗山に登り、朝風呂とビールを浴びたそうです。朝風呂とビールもお忘れなく)

本間

4月28日 早雲山 神山 駒ヶ岳 桃源

台泊 29日 湖尻 三国山 箱根峠

三井

4月30日 会津駒 檜枝岐からの往復、駒

の小舎はまだ埋まっていた。

西牟田

4月21日 御前山 都民の森の先から、小河内峠経由往復。

4月29、30日 西谷山の避難小屋に泊まり、長沢背稜から三峰神社へ。連休で西谷山の小舎に6人も泊まつたとか。

竹中

4月30日 西大巔 天元台から。

5月14日 早朝5時8分大町着、前夜泊の佐薙、上原と扇沢から爺の南尾根経由、南峰13時25分 冷山荘15時15分 15日 悪天で往路を下山、2人は今日、鹿島に登つている筈。

山本

5月3日 中宮自然保護センターの先、野猿観察小屋まで歩道あり。小屋対岸の尾根

の踏跡を直登5時間、冬瓜山手前で稜線に出てテントを張る。4日 テント 5時15分 冬瓜平から稜線の西側の雪の上を巻いて笈ヶ岳直下のコルに出て、福井県側の残雪を伝い頂上9時20分～40分、テント12時40分～13時20分、センター帰着17時

小屋手前の谷が増水していて靴に水が入った。センターに車を置いて空身で往復する

地元の人が多いが、勿体ない登り方である。

本間

山本

蛭川

西牟田

前神、金子君が帰国、一緒に登りたい。

山本

ヤローカー

有賀

ヤローカー

那須温泉

高橋

世田谷保健センターのストレッチングと

ウォーキングの会に参加。

西牟田

前神、金子君が帰国、一緒に登りたい。

山本

ヤローカー

ガリの予定、渡辺くんも参加。

蛭川

西牟田

前神、金子君が帰国、一緒に登りたい。

山本

ヤローカー

有賀

ヤローカー

那須温泉

高橋

世田谷保健センターのストレッチングと

ウォーキングの会に参加。

西牟田

前神、金子君が帰国、一緒に登りたい。

山本

ヤローカー

ガリの予定、渡辺くんも参加。

蛭川

西牟田

前神、金子君が帰国、一緒に登りたい。

山本

ヤローカー

ガリの予定、渡辺くんも参加。

6月11、12日 鳥海山

蛭川君からのFAXに「菅平の宿について花の百名山の編集者に問い合わせたら同行希望。なんでも近々四阿山のことを書くそ�です。その取材かも?」とあり、この言い訳がましい添え書きを読んだ一同、どつちが同行希望したのか分からぬ、岩手のカタカナの山はどうなつた、川名さんが行くなら何処でも良いとは無節操だなどの意見が噴出、おかげで酒が弾みました。

◇ ◇ ◇

連休前の4月23日、慶應義塾大学体育会山岳部の創立90周年の記念行事が、登高会会員約200人と各大学山岳部のOB100人が出席、盛大に行われました。三田の山に行くのは昭和28年春に入学試験を受けに行って以来のこと、建物が増え試験を受けた教室も、合格発表の掲示板の場所も思ひだせません。シェーケスピアの誕生日で命日にあたるこの日に式典をするのはしゃれでいると言いそうなつて、それは3月23日だと気が付き恥をかかずすみました。登行会の皆さんのが部歌「守れ権現」を歌いましたが、この部歌の作詞者が北原白秋、作曲者が中山晋平とは驚ろきです。こ

ちらもいざれ90周年を迎えます。そろそろ準備体制を整えたほうが良いでしよう。

立高のOBでもある田辺寿さんに合つたら、7月初めに甘利さんの法要があると教えられました。甘利さんは平成7年7月7日に亡くなられたので、13回忌には早い様な気がしますが、ものにこだわらない甘利さんのこと、四捨五入でもされたのでしょうか。

たまたま山岳会の図書室で旧い『登高行』を調べていたら、大島亮吉さんの遭難の報告が載っていました。その後に告別式の記事があり、200人を超える参列者のなかに近藤恒雄、中島嘉一郎、芋川稔一先輩のお名前を発見しました。藤山愛一郎、宇都宮数馬、あるいは木暮理太郎、黒田正夫、角田吉夫など登高会以外の方が幅広く参列されていましたが、針葉樹会の諸先輩も大島さんとの付き合いがあつたようです。もつと早く気が付いていれば、コンちゃんから大島さんの話が聞けたのに後の祭りです。また参列者に山田二郎という名があり、マナスルやヒマルチュリで活躍された元日本山岳会々長の山田二郎さんは私より10歳くらい年上、未だ小学校にも入っていない筈、お聞きしたら早稲田の旧い先輩に同姓

同名の方がいらしたそうです。そういうえば国立で入部の挨拶をして名を名乗つたら、鹿俣さんに慶應に山本雄一郎という名リーダーがいた、似た名前だから頑張れと励まされたのを思い出しました。

なお大島さんの告別式は4月14日に行われているのですが、遺体発見は5月末、どうした事情があつたのでしょうか。

伊藤助成さんが亡くなられました。調査部のとき課長の小山さんと大阪に出張したところ、今夜は伊藤さんがご馳走してくれるから君も来いといわれ、伊藤さんなら山岳部の先輩ですと言つたら驚いていました。小山さんは伊藤さんの同級生、中山ゼミで、後に倉知くんと欧州の銀行グループの東京事務所を運営していました。この時は心斎橋辺りで「すっぽん」をご馳走になりました。人事の仕事をしておられ、私は組合の副委員長、いろいろ質問を受けました。その後東京の有価証券部に移られ、私も証券投資の仕事をしていましたので、良く電話が掛かってきました。仕事熱心で、幅広く情報を集められているなど感じたのを思い出しました。お別れ会は5月31日、ホテル・オークラの平安の間で正午から開かれます。

「たかはし」が店を閉める前にビブランの張り替えをしなければなりません。取りあえず1足持つて行き話し込んだら、高橋家のお墓の隣に土方家（大和屋という大きな質屋さんだそうです）のお墓があり、土方くんの記念碑があるそうです。「たかはし」の靴を履いて亡くなられた方なので、お墓参りに行く度に土方くんの碑にもお参りしているそうです。お寺は浄土宗の西方寺、高円寺堀之内のお祖師様の近くだそうです。

勝田さんが亡くなられました。望月さんの告別式でお目にかかったのが最後でした。

山崎擴さん 下記に転居されました。

〒254-0813

平塚市 袖ヶ浜 7-56-304

TEL/FAX 0463-21-7225

金子晴彦くん 株JALロジスティックス  
03-3762-5721

前神直樹くん

双日マリン・アンド・エンジニアリング株

03-3270-2128

アイガーの小屋に泊まつた方は、三月会に

来て再建募金に応募した俺にビールを一杯おごるべし。待っているぞ。

## ■6月20日

〔出席者〕 山崎擴 三井博 蛭川孝夫 西牟

田伸一 山本健一郎

(文責 山本)

\*石井さんはアメリカに里帰り、竹中くんは如水会の理事会、その他の常連も針葉樹会の会合が続く為か顔を見せません。

### ●山行報告

#### 山崎

鼻曲山に登り霧積温泉泊、翌日は旧中山道を碓氷峠まで、坂本宿から9・5キロ 標高差600米、安政の遠足（とおあし）が行われていた良いコース。

#### 石井

望月さんゆかりの望月を訪ね和田宿に泊まり、和田峠を越えて諏訪に降りた。次は下諏訪から塩尻峠を越え先馬に出る予定。

#### 三井

5月29瑞牆山荘から瑞牆山往復。

あとは相模湖から弁慶橋経由城山に登り、小仏峠から底沢に降り、弁天島の天下茶屋で風呂に入つたがサービスが悪い。

### 蛭川

小野くん上京の機会を捕らえ5月19日、黒斑山に登り鹿沢の紅葉館泊、翌日は草津白根、その後菅平を取材中の川名さんを交え四阿山と根子岳。紅葉館でかの有名な「南竹さんの歌」を風呂場で歌つたかどうか聞き漏らしました。南竹さんを誘つてあげるべきです。

6月4、5日 諏訪山 赤久縄山 西御荷鉢山（高校の友人の追悼登山だそうですが、30年後まで取つておいて良い山です）

#### 西牟田

6月3、4日 帰国した金子くんと谷川岳

西黒尾根と尾瀬山の鼻。

#### 山本

6月13日 愛鷹山 須山から越前岳に登り十里木に降りた。東富士演習場の大砲の音がうるさいが、極めて正確に12時から1時までは静かになった。こんな演習では実戦の時には役に立たないだろうと思ひながら静かに昼食を楽しんだ。

### ●山行計画

#### 山崎

幸い佐薙さんが来ないので、夏の南アのほとんどもない計画を押しつけられずにほつとしている。三伏から塩見往復くらいが分相

応と思う（そんな事言わずに蝙蝠越えて二

軒小屋まで降りて下さい）

三井

7月1日 岩手山

7月2日 磐梯山へ遠藤くんと

8月10～12日 幌尻岳

蛭川

6月24日～白神山地 赤石川

7月4～9日 樽前山 風不死 旭岳 中

岳 愛別 沼の原山など

山本

7月7～15日 ペテガリ（渡辺） 十勝

オプタテシケ

竹中

7月2～4日 鳥海山（本間氏ほかと）

「イス・アーミーナイフのこと」

皆さんも1本はお持ちだと思います。私の手元に4～5本あります。最初に色々なものが付いている重いのを買つてしましました。これは後で知ったのですが釣り用でした。鱗の年輪を数えるためのルーペ、飲み込まれた針を外す針外し棒、この棒には目盛りがあり、体長15センチとか20センチ以下の魚を再放流しなければならない漁場で体長を計るためのものです。またこの棒には鱗落しの歯が付

いていて重宝しています。

私が現在山を持って行くのは、鋸と鉋が付

いているナイフです。山の中ではツエルトのポール、杖、骨折部に当てる副木などに木の棒が必要になることがあります。こんな時細い木の枝でもナイフで切り取るのは大変です。ところがこの鋸があればあつと言ふ間に切断出来ます。西洋式で押すと切れる歯ですが切れ味抜群、山の中では心強い味方です。

山スキーに行く時はドライバーとプラスとマイナスのドライバーが付いたナイフを愛用していましたが、近年軽くコンパクトなドライバーにドライバーが付いている工具を山の店で手に入れ、こちらを愛用しています。

銀座線末広町の渋谷方面行き乗り場の前に、イス・アーミーナイフを安く売つている店がありました。市価の半分以下、付属のピンセットや楊枝のスペナーを100円で売っています。ある時大小2つの刃と缶切り、栓抜きだけの小振りのナイフを800円で安売りしていたのでまとめて買い、何時もザックに一つ入れておき、車に乗せて貰つたり世話になつた時にお礼に上げていました。れっきとしたヴィクトリノックスですから相手はびっくり、こんなものを頂いて申訳ありませんと恐縮されますが、千円札を渡すより安上がりなのです。空港の所持品検査でナイフが

引っ掛けたため乗り遅れ、格安航空券をバーにした人が昔いたそうですが、この店をご存じなかつたのでしょうか。

何時かコルク抜きが付いたナイフが必要と言つた方がいました。私は横を向いてフンと笑いました。コルク抜きが無い時は錫のシールをはがし、ボトルの底にタオルか毛糸の帽子を巻いて水平に持ち、立ち木か壁など堅いものに底をトントンと打ち付けるとあら不思議、コルクが次第に押し出され、3分もすれば美味しいワインにあります。一度お試し下さい。

白ワインを冷したい時は濡れた新聞を巻き付け、車の窓から突き出し5分も走れば良いと言うことをご存じの方は多いでしょう。山の中でも濡れタオルを巻いて風に当てる良く冷えます。

20年とか30年物のポートはコルクがぼろぼろになつてるので「やつとこ」みたいな道具を使います。この刃を暖炉の火で真赤に焼いて、ボトルのコルクの下辺りを挟んで熱してから、濡れタオルを巻き付けるとピンとシャープですから怪我をしない様に注意して下さい。この頃の空き巣これからヒントを得

たのかもしれません。この「やつとこ」が欲しくて仕方がないのですが、そんな高価なポートを空けることはそうないし、暖炉も作らなくてはならないので買う決心がつきません。私はコーヒー用の紙フィルターでコルク粉を取り除いています。

鈴木羊三名誉会員から写真集『薦・深呼吸』が送られてきました。なかなかの出来栄え、

眼医者になつたのは間違いではないかと思ひます。薦はご存じ大町桂月で有名な八甲田山南麓の温泉のある処です。ドクターの奥さんの実家がこの近くの天間林村なのでよく行くそうです。遠征の時36歳にもなつて嫁さんの来手がなかつた沼津の住民のところに、一体どうして東北美人がやつてきたのか不思議です。当時隊員はみな、ドクターのところに嫁さんのがくる訳が無いと信じていました。

4月ダッヂ・オーブンのことを書いたら、山本尚くんからヤロー会が那須に行き、小林正直くんの発案で「飯盒炊爨」することにしたら、原くんが見兼ねてダッヂ・オーブンで美味しい「東坡肉」を作つてご馳走してくれたとの報告が来ました。写真も同封されていて、ダッヂ・オーブンは黒光り、所謂ブラック・ポットになっていて、原君が良く使い込

んでいる様に見えました。それにしても「飯盒炊爨」なんて20世紀の言葉をまだ使つてゐるとは恐れ入りました。ヤロー会には進歩がありません。私だつて「アウトドア・クリギング」という言葉くらい知つているのに、まさに前世紀の遺物達です。「飯盒炊爨」という言葉をワープロは知らない、変換するのに苦労しました。

それに私が原くんにプレゼントしたダッヂ・オーブンの恩恵に浴したのに山本くんが「原くんは鍋を使いこなし、専門家以上の腕です。写真を添えてご報告します」と言つてきました。ただ、折角写真を送つてくれた山本くんに悪いのですが、写真は食べられないし匂いもしません。おまけにあとの人からは何の挨拶もありません。那須の地酒でもぶら下げて三月会に出て來ても罰は当たらないと思いますが、後輩を厳しく教育しなかつた私が悪いのでしょうか。ヤロー会の諸君は「明日はわが身」という言葉があるのを知らないようです。

早速ヒュー・ジョンソンのワイン・イヤー・ブックの04年版でこのPenfoldsというワインを調べましたらかなり長い記述があり、オーストラリアの高品質の赤ワインを供給する醸造所で、昔はハーミテージの名で知られていたとあります。この本は新書版くらいのハンディな本で、年末に丸善で手に入ります。毎年買つていた銀座

■7月19日  
【出席者】 石井左右平 山崎擴 佐薙恭 有  
賀盈 中川滋夫 三井博 高橋信成 蝶川  
孝夫 竹中彰 山本健一郎 (文責 山本)

この記録を書いていると時には良いことがあります。那須で原くんの作った料理を食べた人は那須の地酒でも持つて来いと書いたました。開けてくれるように頼んだら、顔馴染みのマネージャーレスがしばらくして、よい香りのワインですが、濁がたまつていて渡してデキヤンターに移しましたといつて持つてきました。この人は東京会館プロパティの社員ではないかと思ひますが、飲み物と料理の知識が豊富で大変行き届いた人です。ワインは十数年前のもの、赤の良いものでもそろそろ寿命が尽き掛けているかと思いましたが、佐薙さんみたいに年を取つてもへたらないワインもあるようです。美味しく頂き瓶は持ち帰りました。ラベルをはがせば良いのですがこの頃接着剤を使つていることが多く、はがすのに苦労するからです。

のイエナが閉店、慌てましたが丸善にあるのを発見しました。この本はお勧めです。有賀君ご馳走様でした。

### ●山行報告

石井

イエローストーン公園に行き、オリンピック山に登った。標高約2500米だが登り出しの標高が低い。この公園は四国の半分の面積があり、1872年に国立公園の指定を受けているから、米国の自然保護の歴史の深みを感じさせられる。

佐薙

6月中旬 オアフ島の山、高尾山の半分のアルバイトだがJTBのランクでは上級。

中川

4月 御坂の黒岳

6月 渋の湯から天狗、根石の小屋に泊まり稻子に降りた。

蛭川

6月 白神

7月4~9日 小野くんとその友人の3人で樽前山、風不死岳と大雪の緑岳、小泉岳、白雲岳、沼の原山に登った（沼の原山とは深い）

三井

7月1日 磐梯山 遠藤くんの車で同級生

2人も加え出発、2日 猫魔八方台から往復

7月14日 岩手山 前夜発日帰りのバスツアーパーに参加（あの山標高差1400は大変と思いきや、意外に楽だった記憶があります）

高橋

大山でトレーニング、ケーブル下の小川屋で豆腐料理を楽しんだ（次回は代官山の小川軒にどうぞ）

竹中

7月2~4日 鳥海山 レッドキックの殿様他2名 2日現地入り、3日湯の台から新山に登り、千蛇谷から鉢立に降りた（レッドキックのご厄介になるのも無理からぬアルバイトですが、5月にスキーを使えばあつという間に降りられます）

山本

6月 愛鷹山と鍋割山

石井

7月7日から十勝岳（雨で途中まで）と富良野岳、10日渡辺くんを千歳で拾いペテガリを目指すも、林道の崩壊でオブタテシケに転進、12日美瑛の避難小屋に入り美瑛富士、13日快晴に恵まれオブタテシケ。阿寒、ニペソツ、石狩が見え、眼前のトムラウシから忠別、旭岳に続く表大雪の大展望を楽しんだ。14日はニセイカウシュッペ、小生

は8合目まで（渡辺くん折角来たのにペテガリが駄目で申訳なし）

### ●山行予定

三井

越後駒と中の岳 8月26~28日 26日朝 東京発、枝折峠から駒の小屋泊、27日丹後山避難小屋泊、28日十字峠に下山。参加予定 有賀 竹中 川名 山本

8月10日から幌尻岳（今年は混んでいるようです）

蛭川

黒部五郎と水晶 百名山最後の鷲羽は9月に夫人と登る予定。

竹中

8月初旬 白根三山 本間くんと

中川

8月初旬 槻島~悪沢~赤石~槲島

佐薙

山崎 佐薙 南アは三伏峠からの塩見往復に落ち着きそう

平標~谷川岳~蓬峰 極楽平~木曾殿越など

懇親山行

皆さんからアダージオの雰囲気が良い、阿

弥陀の南稜に行きたい、あまり遠くまで行くのは面倒などの意見が出ました。竹中くんに皆さんのお見を伝えてありますので、兵藤くん、近藤くん宜しくご検討下さい。

中村保くんが12月3日の英國山岳会の年次晩餐会に招かれてスピーチすることになりました。まずブラックタイくらい持つていいだろうけれど、クリーニングに出さなくてはなるまい、大変だと思いました。しかし英國山岳会からの招待状を見せてもらつたら服装はインフォーマルとあり、随分変わつたなと思いました。

1957年に開催された同会の創立百周年のパーティには楳さん、松方さんが出席されました。が、エベレスト登頂で戴冠式に花を添えた同会の記念式典とあつてエリザベス女王二世も臨席され、服装はホワイトタイでした。これは燕尾服（白蝶タイ・白チョッキ）ですから私は着たことがありませんし、女性は夜会服です。確かにミニヤ・コンカの登頂者のムーアも招かれて女王に拝謁していますが、TAILSを着てと書いてあり字引を引いて何だ TAILED SUITのことかと納得した記憶があります。

シンガポールで英国人のクラブに入つていましたが、ある年のクリスマスイブにウイーング少年合唱団のコンサートがあると知り、聞きに行こうと思い立ちました。あの国ではクラシックのコンサートなど皆無に等しく、4年間にN響が一度来ただけです。この時室内ホールなど無いクアラ・ルンプールでの演奏会では、開演直後スコールが襲来、団員たちはヴァイオリンやチェロを抱えて逃げ惑つたという笑い話があります。雨期に屋外のコンサートなんて無茶な話です。

そんな訳で子供のコーラスでも悪くないと思ひ秘書にチケットの手配をたのみましたが、英国人のクラブでのクリスマス・イブの行事だと気が付いて、服装の指定があるか聞いてくれといいました。これは大正解、秘書が笑いながらブラックタイだがボスは持つていなかつたが、貸衣装屋を当たつているが手當て出来そうにないので、切符の手配はやめだと報告にきました。このコンサートは断念し後日クラブの使用人にどうだったと聞いたら、ご夫人方が着飾つて来て素晴らしかったそうです。英国人はこんな暑い国にまで礼服を持ってきて、虫干しの機会を楽しんでいるようです。その後米銀の支店長と飲みながらこの話をしたら、かなり辛辣な英國人に対するコメントを聞かされました。

シンガポールでは毎週のように銀行の新規開設や支店長交替のパーティがあり、その服装が悩みの種でした。英國系企業の招待状でINFORMALとあれば、ホワイトタイ、BLACKタイ以外の服装を指すので、ダークスーツに白シャツ、地味なネクタイが必要でした。昔はインフォーマルはホワイトタイ以外の意味だつたと聞いたことがあります。米国系企業の招待だと、INFORMALでも可成碎けた服装の人を見掛けますし、TIE AND JACKETとかCASUALなどと書かれた招待状が普通でした。私も話の種に一度ホワイトタイを着てみたいのですが、山岳部の90周年パーティにはホワイトタイで集まつたらどうでしょう。

会報幹事のご努力で104号がお手元に届いた頃です。27頁下の段で景山くんの名前が2か所とも蔭山になつていました。景山くん失礼しました。あまり出てこないから名前まで忘れそうになつてしまつたじやないか。おまけに22頁では景信山が影信山になつていました。「景」にたたられていくようです。英國人はこんな暑い国にまで礼服を持つてきて、虫干しの機会を楽しんでいるようです。その後米銀の支店長と飲みながらこの話をしたら、かなり辛辣な英國人に対するコメントを聞かされました。

# 平成17年度針葉樹会総会報告

於 平成17年6月25日  
如水会館

## 1 平成16年度活動報告

日井、有賀、山本(尚)、高橋、蛭川、竹中、本間、西牟田、川名、鳥本(学生)

### 【懇親山行】

①平成16年11月13(土)～14日

(日) 蓼科の松尾会員のペニ

ション「アダージオ」に集合、夫々の計画に沿つて焼岳、蓼

科山、東・西天狗岳、車山等に登り、散会しました。一部メンバーアーは同じ蓼科にある山

本別邸にもお世話になりました。参加者は次の15名。山本

(健)、渡辺、中西、三井、高橋、西牟田、松尾、兵藤、近藤、川名

スチヤ、中西夫人、女子留学生ジヤンカルラ(米)、カン(韓)

②平成17年2月6日(日) 富士山の眺望を楽しむ手頃な懇親山行を企画し、好天に恵まれて百蔵山～扇山の稜線を歩き、石井、山崎、春日井さんとは扇山山頂で合流しました。下山後の八王子の居酒屋でも大変盛り上がりました。参加者は次の15名。石井、山

ほか各氏のご協力を得て、バッ

クナンバーを収集(戦後復刊1

106号 平成18年1月発行  
②針葉樹会報バックナンバー合  
本完成

完成予定日 平成17年6月  
収藏先 如水会館図書室、

日本山岳会図書室

会計幹事  
米田 篤裕 S 55(留任)  
有賀 盈 S 36(留任)  
井草 長雄 S 48(留任)  
川名 真理 S 62(留任)  
大谷 公重 H 10(留任)

松田 重明 S 53(留任)  
古瀬 泰介 H 8(留任)  
山行幹事  
竹中 彰 S 39(留任)  
近藤 泰 S 53(留任)  
古田 茂 H 7(退任)

会長 西牟田伸一 S 47

副会長 三井 博 S 37

評議員 小林 茂雄 S 19(留任)

石井 左右平 S 23(留任)

横山 晴一 S 27(留任)

石原 健(議長)

佐羅 恭 S 31(留任)

山本健一郎 S 32(留任)

中村 保 S 33(留任)

佐々木 誠 S 43(留任)

井草 長雄 S 48(留任)

兵藤 元史 S 52(留任)

近藤 泰 S 53(留任)

白石 章治 S 61(留任)

古田 茂 H 7(新任)

鷲崎雄四郎

小林進二

勝田 有恒

伊藤 助成

朝木 大統

勝田 有恒

伊藤 助成

朝木 大統

鷲崎雄四郎

小林進二

勝田 有恒

伊藤 助成

朝木 大統

鷲崎雄四郎

小林進二

勝田 有恒

伊藤 助成

朝木 大統

【懇親山行】  
①秋季懇親山行 妙高山辺りを計画したい。  
②平成18年2、3月頃に雪上ハイク宣教師の道と題して最

イク。

【会合】  
③三月会の場等を通じて、会員相互の計画披露と情報共有化など。

幹事会 平成17年6月6日  
評議会 平成17年6月16日  
新年会 平成17年6月27日

幹事会 平成17年6月6日  
評議会 平成17年6月16日  
新年会 平成18年1月

監事 渡辺 嘉佑 S 35(留任)  
新会員 鳥本 真司 H 17卒業

監事 渡辺 嘉佑 S 35(留任)

中村 雅明 S 43(留任)

佐々木 誠 S 43(留任)

【出版物】  
①針葉樹会報の発行  
102号 平成16年10月発行

【出版物】  
②針葉樹会報バックナンバー合  
本製作  
103号 平成17年1月発行

【出版物】  
①針葉樹会報の発行  
104号 平成17年6月発行

【出版物】  
②針葉樹会報の発行  
105号 平成17年10月発行

崎、佐薙、高崎、山本(健)、春郎、小野肇、有賀盈、倉知敬、

小林茂雄、石原脩、山本健一郎、小林茂雄、石原脩、山本健一

幹事 代表幹事  
兵藤 元史 S 52(留任)

**針葉樹会平成 16 年度一般会計決算**  
 (平成 16 年 6 月 1 日～平成 17 年 5 月 31 日)

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
会報発行費	491,260	450,000	前年度繰越	410,146	410,146
山岳部補助	96,000	145,000	納入会費	460,000	500,000
通信連絡費	102,161	41,035	会合余剰金	11,162	20,000
慶弔費	31,500	30,000	郵便貯金利子	21	30
学生保険補助	0	10,000			
日本山岳会百周年事業募金委員会	100,000	0			
会報バックナンバー合本費	0	200,000			
次年度へ繰り越し	60,408	54,141			
合計	881,329	930,176	合計	881,329	930,176

**針葉樹会平成 17 年度一般会計予算**  
 (平成 17 年 6 月 1 日～平成 18 年 5 月 31 日)

支出			収入		
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績
会報発行費	450,000	491,260	前年度繰越	60,408	410,146
山岳部補助	100,000	96,000	納入会費	500,000	460,000
通信連絡費	40,000	102,161	会合余剰金	10,000	11,162
慶弔費	30,000	31,500	郵便貯金利子	30	21
学生保険補助	20,400	0	遭難対策基金より入 金(日本山岳会百周 年事業募金分)	100,000	0
日本山岳会百周年事業 募金委員会	0	100,000			
会報バックナンバー 合本費	20,000	0			
次年度へ繰り越し	10,038	60,408			
合計	670,438	881,329	合計	670,438	881,329

**針葉樹会平成 16 年度遭難対策基金予算**  
 (平成 16 年 6 月 1 日～平成 17 年 5 月 31 日)

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
学生保険補助	0	10,000	前年度繰越	4,266,072	4,266,072
			内遭難対策基金	3,366,072	3,366,072
			内遠征基金	900,000	900,000
次年度へ繰り越し	4,268,072	4,269,072			
内遭難対策基金	3,368,072	3,369,072	一般会計より(学 生保険補助)	0	10,000
内遠征基金	900,000	900,000	利息収入	2,000	3,000
合計	4,268,072	4,279,072	合計	4,268,072	4,279,072

**針葉樹会平成 17 年度遭難対策基金予算**  
 (平成 17 年 6 月 1 日～平成 18 年 5 月 31 日)

支出			収入		
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績
学生保険補助	20,400	0	前年度繰越	4,268,072	4,268,072
一般会計へ支出(日 本山岳会百周年事業 募金分)	100,000		内遭難対策基金	3,368,072	3,368,072
			内遠征基金	900,000	900,000
			一般会計より(学生保険補 助)	20,400	0
次年度へ繰り越し	4,170,072	4,268,072	利息等	2,000	2,000
内遭難対策基金	3,270,072	3,368,072			
内遠征基金	900,000	900,000			
合計	4,290,472	4,268,072	合計	4,290,472	4,270,072

## 編集後記

◇ 今号でも二人の会員が亡くなられた事ををお伝えしなければなりません。

5月25日 鷺崎雄四郎さん（昭14学）

8月31日 春日井 実さん（昭32）

お二人のご冥福を心よりお祈りいたします。

今回は投稿者のうち4人が平成卒でした。年齢の広がりが内容のバラエティを一段と広げたといえると思います。今後ともこの調子を続けたく皆さんのご協力をお願いします。

中西さんの力作、西中國山地を興味深く読みました。日本に住みながら知らない所だらけの編集子にとり、信越地方に優るとも劣らぬ豪雪地帯が西日本にあるとは新鮮な驚きでした。見事な原生林がまだある程度残っている事に心が慰められます。近年地球温暖化の影響か、豪雨や台風が益々強烈になり被害も大型化しているようです。山国日本では森林をはじめとする国土の保全が焦眉の急であり、我々も今までのコンクリート文化一辺倒から森林文化への方向転換が必要と思われる今日この頃です。

（有賀）

◇『週刊朝日』のグラビア連載で、登山インストラクター岩崎元郎さんの「新日本百名山」の構成をしています。日本百名山は、深田久弥氏の日本百名山のうち、約半分を入れ替え、各都道府県から一山は紹介するというもの。日本山ベスト100というつもりはなく、中高年の登山初心者向けにいろんな登山を経験してもらうための参考として100山を選んだとのこと。深田百名山とは主旨を異にするのですが、ネーミングがネーミングだけに、なぜあのラインナップが百名山か、と批判も受けているようですね。それはさておき、その岩崎さんの登山教室に8月上旬に

参加させてもらいました。場所は月山で、弥陀ヶ原から姥沢へ下りる行程。参加者は50代半ばから70歳までの生徒さん4人のほか、編集部から4人参加。ふだん運動をまったくしないという私と同年代の女性も含み、少々不安でしたが、全行程にわたって軽い有酸素運動のような負荷しかかかりず、みなラクラクと登っていました。

ラクだった理由は、ゆっくりと歩いたから。ただそれだけのことですが、最初から意識的にゆっくり歩くことで、山登りがローインパクトなスポーツに変わることを実感。これは登山の概念を変える「コロンブスの卵」的な発見ではないかと、ひそかに感動しました。

針葉樹会の元気な先輩方には当分無縁なお話でしそうが、「そろそろ山も引退かな」とか「山でリハビリ」とか、あるいは初心者をだまして山に連れて行くような場合、この方法は有効です。ちなみに山岳部上がりの身としては、「速く、強く」を良しとするアタマを切り替えて、ゆっくり歩くのは、意外と難しいことでした。日安はコースタイムの1・2倍です。『週刊朝日』9月16日号に体験ルポを掲載してもらいましたので、よろしかつたらご一読ください。

（川名）

◇ だいぶ遅くなりましたが、針葉樹会報の戦後復刊ぶんの合本ができあがりました。復刊1号から100号までが4分冊にまとめられています。日本山岳会の図書室、如水会館の読書ルーム、国立キャンパスの山岳部部室にそれぞれ備えられますので、皆さんどうぞご利用ください。

なお編集会議で相談の結果、今号から追悼文集を巻頭に掲載しない構成にいたしました。山本健一郎さんのピックルのコラムもページ数の関係で、今号はお休みさせていた

（井草）